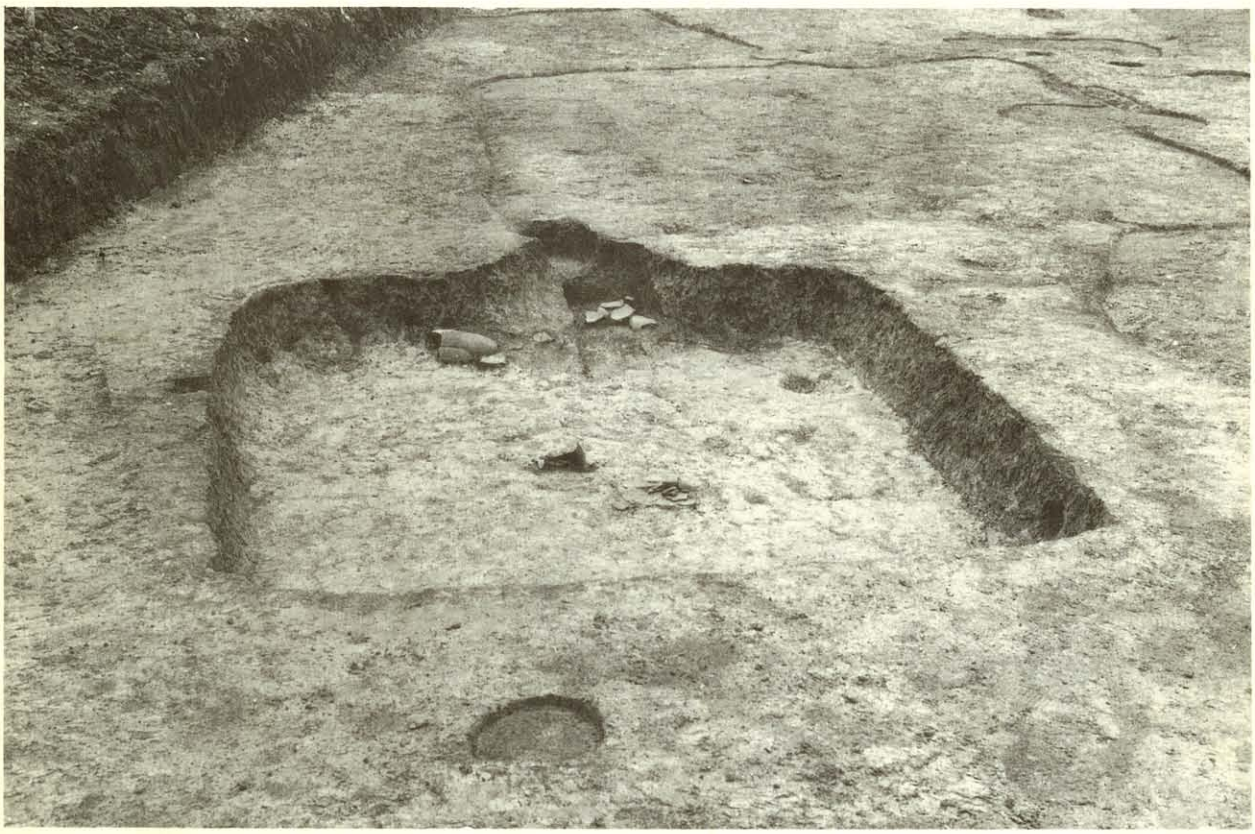
築館町文化財調査報告書第１集

伊　治　城　跡

―昭和62年度発掘調査概報―



昭和63年３月

築館町教育委員会

築館町文化財調査報告書第１集

伊　治　城　跡

―昭和62年度発掘調査概報―

昭 和 63 年 3 月

築 館 町 教 育 委 員 会

序　　言

伊治城が築館町城生野に擬定されてから大分長い歳月が経過しました。

この地が既に宮城県多賀城跡調査研究所によって、発掘調査されているのは御承知のとおりであります。この調査では、北の端をめぐって幅1.3mの土塁とその北側に幅約10m、深さ3.5mの大溝が確認されました。また城内からは、竪穴住居跡と共に城厨や国名などの墨書された須恵器や土師器、さらに瓦や円面硯も出土しました。

その後しばらくの間調査は途絶えておりましたが、町教委では本年度から補助事業による調査を再開しました。調査の結果は20数棟の竪穴住居跡と共に土師器、須恵器が出土し、かつての調査成果を再確認することができましたが、残念ながら伊治城を確定するまでにはいたりませんでした。

調査にあたっては県教育庁文化財保護課、多賀城跡調査研究所から種々の有益な御指導・御助言を賜りましたことに心から感謝申し上げます。調査は63年度も継続実施いたしますので、倍旧の御指導・御援助をお願い申し上げます。

築館町教育委員会　教育長　千葉與一郎

例　　言

1. 本書は、宮城県栗原郡築館町字城生野に所在する伊治城跡の昭和62年度発掘調査概報である。
2. 本書には、国庫補助事業による調査２件、現状変更に伴う緊急調査４件の調査成果を収録した。
3. 調査は、築館町教育委員会が主体となって実施した。
4. 図版の作成ならびに本文の執筆・編集には、教育委員会主事菅原祥夫があたった。なお、鈴木英孝、若生志津子、川原三知子、熊谷信裕、小沢留美子、門目たえ子の各氏には、本書の作成にあたり、御協力をいただいた。
5. 地区割は、富野公民館前の任意の点を発掘基準点として定め、この点を原点（０，０）とする直角座標を組んで割り出している。発掘基準線の南北軸はN2.5° W（Nは第X系座標北）である。
6. 遺構略号は次のとおりで、全遺構に通し番号を付した。

   SA　柱列跡　　SE　井戸　　SX　その他遺構

   SB　建物跡　　ＳＩ 竪穴住居跡・竪穴遺構

   SD　溝跡　　SK　土壙
7. 遺物略号は次のとおりで、各種別ごとに番号を付した。

   A　縄文土器　　D　土師器（ロクロ使用）　　G　平瓦・軒丸瓦

   B　弥生土器　　E　須恵器　　K　石製品

   C　土師器（ロクロ不使用）　　F　丸瓦・軒丸瓦　　N　金属製品

   M　手づくね土器
8. 遺物実測図のスクリーントーンは、土師器の黒色処理をあらわしている。
9. 遺構平面図の一点鎖線は、住居貼床の分布範囲を示している。
10. 遺構内に堆積した土層は、人為的なもの、自然堆積したものにかかわらず「堆積土」ということばで表現した。
11　土色は「新版標準土色帳」（小山・竹原：1970）の基準にしたがった。
12. 図版は原則として遺構を1/60、遺物を1/ 3に統一した。

調　査　要　項

1. 遺跡名　伊治城跡
2. 所在地　宮城県栗原郡築館町字城生野
3. 調査主体　築館町教育委員会
4. 調査担当者　築館町教育委員会教育長　白鳥一郎
5. 調査期間　第1次調査　昭和62年7月1日～8月12日
   第2次調査　昭和62年7月14日～7月18日
   第3次調査　昭和62年8月5日
   第4次調査　昭和62年9月1日～9月14日
   第5次調査　昭和63年1月18日～2月9日
   第6次調査　昭和63年2月25日
6. 調査参加者　高橋　佐一、高橋　　槇、高橋　春治、千葉伝之丞、千葉　三郎、
   加藤　利彦、加藤　すえ、小野寺一男
7. 調査協力者　地主：千葉　　慎、加藤　正夫、高橋　一次、二階堂康允
   菅原　次郎、二階堂むら子、伊藤　守一
8. 調査ならびに報告書作成における指導・協力　宮城県教育庁文化財保護課、宮城県多賀城跡調査研究所、東北歴史資料館
   進藤秋輝、加藤道男（宮城県教育庁文化財保護課）
   桑原滋郎、白鳥良一、高野芳宏、丹羽　茂、村田晃一、古川淳一、
   （宮城県多賀城跡調査研究所）
   藤沼邦彦、小井川和夫（東北歴史資料館）
   佐藤信行（日本考古学協会員）
   阿部正光（瀬峰町教育委員会）
   石本弘・橋本博幸（福島県文化センター）
   鈴木勝彦（古川市教育委員会）
   金野　正（郷土史研究家）

目　　次

序　　言

例　　言

調　査　要　項

Ⅰ　調査にいたる経過……1

Ⅱ　遺跡の位置と現状……2

Ⅲ　周辺の遺跡　……3

Ⅳ　伊治城および栗原郡に関する古代史年表……8

Ⅴ　発見された遺構と遺物　第１次調査　ＳＩ５８住居跡……12

ＳＩ５９住居跡……20

ＳＩ６０住居跡……20

ＳＩ６１住居跡……24

ＳＩ６２住居跡……26

ＳＤ６３～６５溝……27

ＳＥ６７井戸　……28

第２次調査　…ＳＩ６８住居跡……30

……ＳＩ６９～７２住居跡……36

ＳＫ７３土壙……37

第３次調査……38

第４次調査……39

第５次調査……41

第６次調査……42

Ⅵ　考　　察　遺構の年代について　……43

本遺跡発見の住居跡について……45

参考・引用文献……47

写真図版　……50

I 調査にいたる経過

伊治城は現在の宮城県栗原郡一帯を統治するため、神護景雲元年（767）に設置された城柵である。文献上には、これ以降延暦15年（796）までの約30年にわたり、しばしばその名が登場する（Ⅳ参照）。 このなかでも伊治呰麻呂が、この城柵を舞台として宝亀11年（780）に起こした反乱は、古代東北史上あまりにも著名である。

この城柵の所在地については古くから多くの議論がなされてきた。なかでも本遺跡はその最も有力な擬定地とされ、主に文献の立場から様々な検討が加えられた。こういったなかで昭和52年～54年には、宮城県多賀城跡調査研究所によるはじめての本格的な発掘調査が実施された。
この調査の結果、遺跡の北辺は土塁と大溝によって区画されていること、またその内部には８世紀末を中心とした時期の多数の竪穴住居跡が存在することが判明し、さらにこれに伴って「城厨」と墨書された土器も出土した。

現在では、この調査成果からみて、本遺跡が伊治城跡であることはほぼ確実とみられている。しかしながら、城柵の中枢部ともいえる政庁跡や官衙ブロックが未検出であること、遺跡の正確な範囲が確定していないなど、今後解決しなければならない多くの問題も残されている。

ところで近年、本遺跡の所在する城生野地区一帯には、開発の波が急激におし寄せている。このため一刻も早く本遺跡が伊治城跡であることを確定し、具体的な保存対策を構ずる必要が生じてきた。そこで築館町では関係諸機関の指導をあおぎ、国庫補助事業による５ヶ年の発掘調査を実施することに踏み切った。

本年度はこの事業の初年度である。具体的には、農道儀平線の整備事業に伴う遺構確認調査を２件、それに現状変更に伴う緊急調査を４件実施した。その詳細については後に譲るが、本年度の調査では、あらためてこの遺跡における竪穴住居跡の分布密度の濃さを裏付けることとなった。

年　度	町負担	県負担	国負担	総　額
６２	５０万円	５０万円	１００万円	２００万円

Ⅱ　遺跡の位置と現状

本遺跡は宮城県栗原郡築館町字城生野に所在する。この場所は多賀城跡の北約52㎞の位置にあり、多賀城と胆沢城を結ぶほぼ中間地点にあたっている。

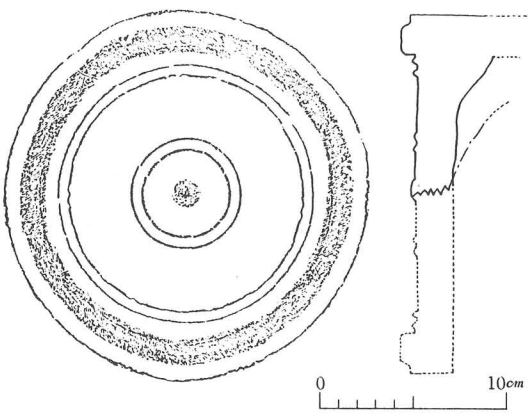
宮城県北部の地形をみると、中央部に北上川が流れ、その西側には奥羽山地が南北に大きくよこたわっている。この奥羽山地は山麓部で多数の河川によって開析され、いくつかの小丘陵に分岐している。本遺跡はその最も北に発達した築館丘陵の末端部と接する河岸段丘上に立地する。

この段丘は周囲を河川、丘陵末端部、さらに小さな谷で画され、独立した地形をなしている。本遺跡の範囲はこの段丘のほぼ全域と推定される。その規模は、東西が約700m、南北は南辺の位置を唐崎地区と地蔵堂地区を画する沢のあたりと考えれば、約650m、一迫川と国道４号線が接するあたりと考えれば、約900mとなる。上面には黄褐色の火山灰層が厚く堆積し、縁辺には周囲との比高差が約６mほどある段丘崖が各所で認められる。現状は、100戸を越える住宅が点在し、それ以外の箇所は主に水田、畑地として利用されている。

現在残っている遺構としては、台地北斜面に東西にのびる空堀状の大溝があり、さらにその北には、これに接してはしる土塁状のわずかな高まりがある。これらは古代において、一対となって機能していたことが宮城県多賀城跡調査研究所の調査(宮多研：1978.３)によって確められている。また地元住民の話によると、かつては台地西斜面においてもこれと同じ遺構が残っていたらしい。しかしながら、開田と鹿島堰の改修のため旧地形は失われ、現在、その所在を確認することはまったくできない。

遺物の散布は台地上のほぼ全面にわたって認められる。その多くは須恵器と土師器が占めており、このなかでも須恵器の量は圧到的に多い。また、瓦の分布も唐崎地区を中心にわずかながらも認められる。

ところで昭和４０年代の前半に、この台地の各所では大規模な開田工事が行われ、その際には多量の遺物が出土した。照明寺の住職であった故松森明心氏は、これを精力的に収集し、現在、町指定文化財として一括して保管されている（築館町文化財保護委員会1969・1970.３）。広大な面積のうちまだごくわずかの調査しか終了していない現在、遺跡全体の概要を知る上で、



第１図　松森氏収集重圏文軒丸瓦

これらは貴重な資料となっている。さて、それによれば、この台地一帯から出土した遺物は、そのほとんどが8世紀末を中心とした1時期のものに集中している。このことは、過去3ケ年の発掘調査（宮多研：1977～1979.3）において発見された多数の住居跡が、いずれもこの1時期にのみ集中することときわめてよく一致している。本遺跡の存続期間を考える上で興味深いことといえよう。また、この松森氏収集の遺物のなかには、重圏文軒丸瓦がある（第1図）。これは陸奥国分寺の創建瓦（741～761）と同一の文様意匠である。

Ⅲ 周 辺 の 遺 跡

本遺跡の周辺には、年代的に近接する奈良・平安時代の遺跡が多い。そのいくつかは、既に圃場整備事業、東北自動車道の建設などに伴って発掘調査されている。これらの遺跡は、本遺跡と直接あるいは関接的に関連すると思われるので、ここでは、その主なものについて紹介しておきたい。

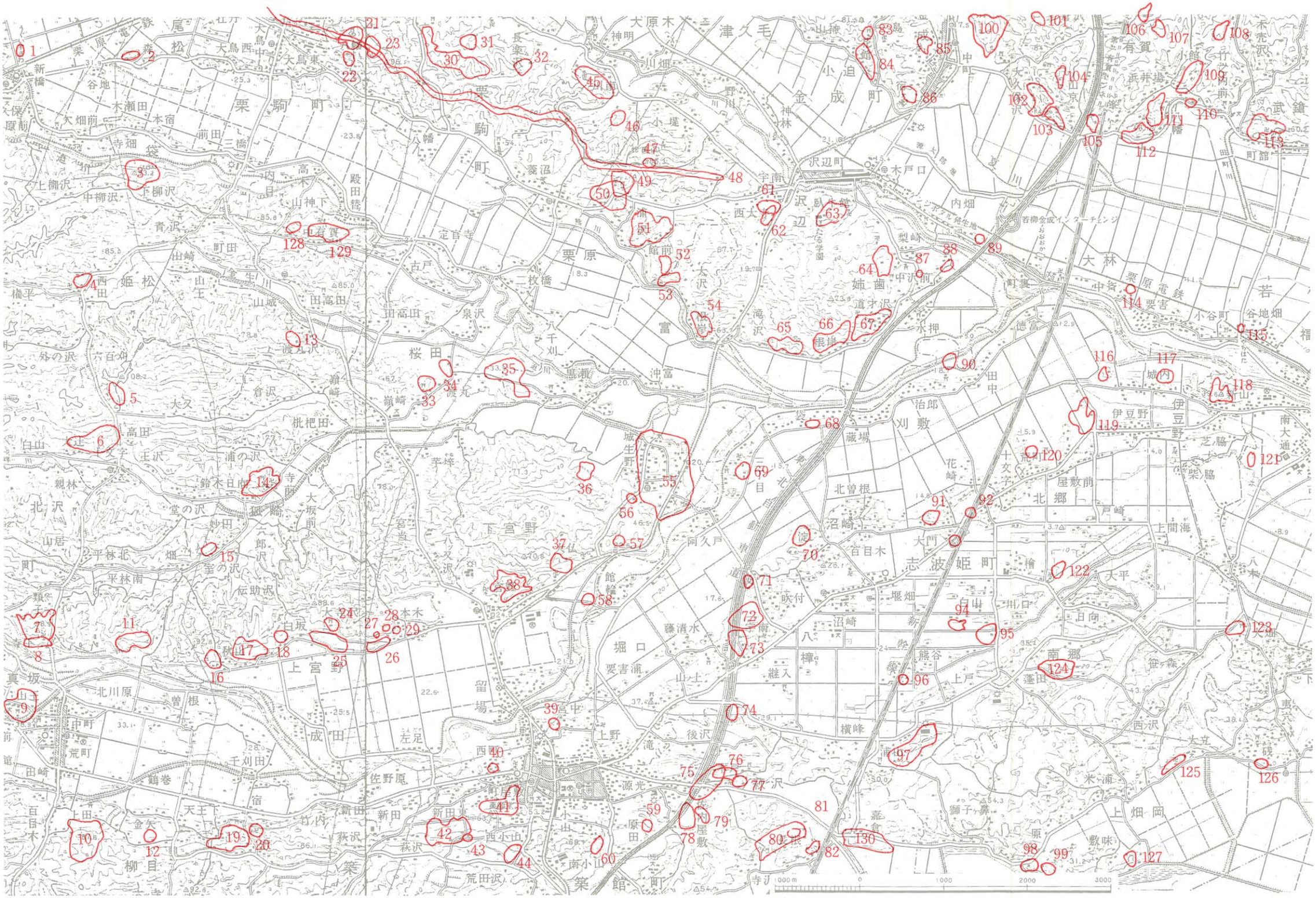
糠塚遺跡は、本遺跡の東約4.5kmの舌状台地上にある。約6000㎡の調査が行われ、奈良・平安時代の住居跡が30棟検出された。奈良時代の住居跡から出土した土器は、宮城県北地方における国分寺下層式の基準資料となり得るものである（小井川・手塚：1978.3）。

山の上遺跡は、本遺跡の南約2.5kmにある。前述の糠塚遺跡と同じ奈良時代（国分寺下層式期）の住居跡が3棟検出された（手塚：1980.3）。

また、本遺跡の東約4kmにある大門遺跡でも、奈良時代の住居跡が1棟、それに平安時代の住居跡が1棟検出されている。

御駒堂遺跡は、本遺跡の南約2kmにある。調査の結果、41棟の住居跡が検出された。これらは出土土器の検討から、5群に大別され、それぞれ7世紀末ないし8世紀初め、8世紀前半、8世紀後半、9世紀初頭の年代が与えられている。この遺跡においてとくに注目されるのは、8世紀前半の段階において、関東系の土器が使用され、また住居構造の点においても関東地方との関連が認められることである。このことについては、関東地方からの人間の移住が想定されており、また、その背景には政治的な意図の存在も予想されている（小井川・小川：1982.3）。　栗原郡の建郡＝神護景雲元年(767)以前において、このような事実が存在していたことは、東北地方における律令体制の浸透過程を考える上で、きわめて重要なことと言わねばならない。

また、発掘調査によるものではないが、本遺跡の東約4kmには、開田工事の際にヘラ切り無調整の須恵器坏等が出土した、狐塚遺跡がある。この遺跡は窯跡と考えられ、本遺跡に製品を供給した可能性がある（金野・佐藤：1976.3）。


栗駒町
栗原
駒場
沢辺町
金成町
小迫町
大林
若柳金成インターチェンジ
志波姫町
姉歯
道守沢
梨崎
内畑
木戸口
水押
徳富
田中
治郎
刈敷
伊豆野
芝脇
屋敷前
北郷
上間海
大平
日向
南郷
笹森
西沢
米浦
上畑岡
花崎
北曽根
沼崎
大門
堀畑
熊谷
上戸
蓬田
横峰
後沢
吹付
藤清水
堀口
要害浦
山土
継入
樟
留場
上宮野
成田
左足
佐野原
鶴巻
千刈田
北川原
曽根
真坂
荒町
中町
上田
金矢
天王
宿
新田
萩沢
荒田沢
築館
南小山
西小山
原田
屋敷
源光
城生野
上野
滝
西大辺
宇南
館前
富沢
泉沢
古戸
牧橋
定昌寺
山神下
殿田替
高木
内ノ目
前田
三橋
本宿
木瀬田
欠畑前
谷地
新橋
栗原電鉄
中資要害
小谷町
若柳
谷地畑
武鎗
木売沢
有賀
兵井場
小館
竹沢
内前
京山
大久保
原前
上柳沢
中柳沢
青沢
山崎
町田
金生川
山王
山城
田高田
西姫松
外の沢
六百刈
倉沢
大久
桃杷田
高田
白山
正
文字
浦の沢
親林
北沢
堂の沢
妙田
平林北
平林南
伝助沢
錦木日向
寺前
大坂前
猿崎
宮当
下宮野
阿久戸
館崎
本木
秋山
白坂
上柳沢
袋
権平
1000 m
0
1000
2000
3000

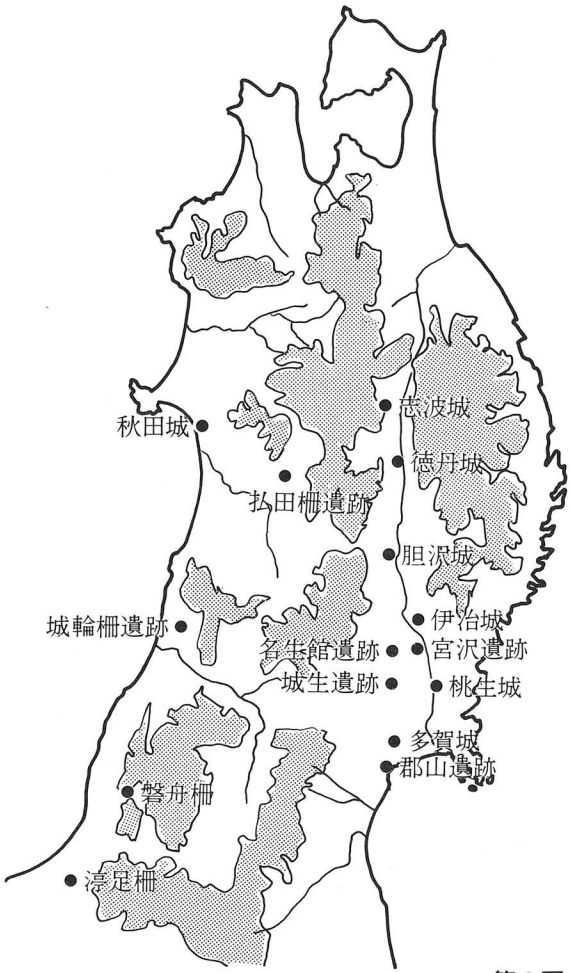
第2図　周辺の遺跡

番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	尾松遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
2	森館館跡（森猪城・稲瀬城）	分離丘陵	包含地	平安？
3	長楽寺々跡	丘陵	寺院跡	
4	片子沢館跡	〃	包含地	中世
5	鋳銭場跡	丘陵斜面	鋳銭場	
6	田中館跡	分離丘陵	城館	中世
7	鹿島館跡（真坂城）	丘陵	城館	中世
8	龍雲寺西沢古墳群	丘陵麓	横穴古墳	古墳（後）
9	国史跡 山王囲遺跡	扇状地	包含地	縄文（晩）・弥生
10	八幡原古墳群	丘陵斜面	古墳	古墳
11	姫松館跡（姫松城）	丘陵端	城館	平安・中世
12	金矢遺跡	台地	包含地	縄文（晩）
13	田高田館	丘陵	城館跡	中世
14	柿ノ木番所跡	谷底平野	番所跡	
15	岩ノ目館跡（立野目城）	丘陵	城館	中世
16	江坂城跡（郷坂城・上坂城）	〃	城館	中世・近代
17	秋山城跡	〃	城館	中世・近代
18	御幣所森古墳群（一本杉古墳・白坂古墳）	丘陵斜面	古墳	古墳（後）奈良・平安
19	柳目館跡	丘陵	包含地城館	弥生（後）・中世
20	妙教寺遺跡	丘陵端	包含地	縄文
21	八幡館跡（営々岡館）	丘陵頂	城館	中世
22	八幡遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文
23	臥牛館跡（伏牛館）	丘陵	城館	（室町）
24	毘沙門古墳群	丘陵斜面	円墳	古墳（後）奈良・平安
25	白坂城跡	丘陵	城館	中世・近世
26	小館山横穴古墳群	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
27	二ノ宮遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文
28	一ノ宮遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文・弥生（中）
29	本木遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文・弥生（中）
30	県史跡 鳥矢ヶ崎古墳群	丘陵斜面	円墳	古墳（後）・奈良
31	猿飛来館跡	丘陵端	城館	中世
32	長楽寺々跡	丘陵	寺院跡	
33	中島遺跡	〃	包含地	平安
34	泉沢A遺跡	台地	包含地	奈良・平安
35	長者原遺跡	丘陵	集落跡	縄文(中)・奈良・平安
36	掘切長根遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良
37	浦沢遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良
38	宮野館跡	丘陵	城館	中世
39	西館遺跡	台地	包含地城館	弥生・中世
40	青野遺跡	〃	包含地	奈良・平安
41	薬師山北遺跡	丘陵斜面	包含地	古墳（前）
42	築館城跡	丘陵	城跡	中世・近世
43	丹下館下遺跡	台地	包含地	縄文
44	小山遺跡	〃	包含地	縄文
45	大原木館跡	丘陵	包含地城館	縄文・中世（鎌倉・室町）
46	陣場遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文（中）
47	蛇田山空濠跡	丘陵頂	包含地	縄文・中世
48	八幡土塁跡（伊治城外郭？）	丘陵斜面	土塁	
49	栗原寺跡遺跡	丘陵斜面	包含地寺院跡	奈良・平安
50	尾松遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
51	栗原館跡	丘陵	城館	中世
52	新山神社跡遺跡	丘陵	包含地	縄文
53	大沢横穴古墳群	丘陵急崖斜面	横穴古墳	古墳(後)・奈良・平安
54	富城跡（天神城跡）	丘陵	城館	中世・近世
55	**伊治城跡**	台地	城柵跡	奈良・平安
56	畦内屋敷遺跡	丘陵端	包含地	奈良
57	大仏古墳群	丘陵斜面	円墳	奈良・平安
58	押切遺跡	自然堤防	包含地	縄文・弥生（中）
59	原田遺跡	丘陵	集落跡	縄文(中)・奈良・平安
60	高田山遺跡	台地	包含地	縄文
61	西館館跡	丘陵	城館	中世
62	西大寺十三塚	〃	十三塚	縄文・中世（鎌倉・室町）
63	沢辺館跡（臥人館・東館）	〃	城館	中世
64	梨崎館跡	〃	城館	中世
65	姉歯横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳（後）
66	上館跡（古館・姉歯館跡）	丘陵	城館	平安（後）
67	大梨館跡	〃	城館	中世
68	刈敷袋遺跡	自然堤防	包含地	縄文
69	刈敷館跡	自然堤防	城館	中世
70	日良館跡	台地	城館	中世
71	鶴ノ丸遺跡	〃	城館	縄文（晩）～近世
72	宇南遺跡	〃	集落跡城館	縄文（前・晩）奈良・平安
73	**御駒堂遺跡**	〃	包含地	古墳・奈良・平安・近世
74	**山ノ上遺跡**	〃	包含地	奈良
75	木戸遺跡	〃	集落跡	縄文（中）・奈良・平安
76	鰻沢遺跡	〃	集落跡	〃 〃
77	萩沢城跡	〃	城跡	中世・近世
78	横須賀貝塚	丘陵地	貝塚	縄文（晩）弥生（中・後）
79	木戸平沢遺跡	台地	包含地	縄文
80	照越台遺跡	丘陵斜面	〃	縄文（中・晩）古墳・奈良・平安
81	桝形遺跡	〃	〃	縄文（晩）
82	玉荻台遺跡	台地	〃	縄文（中・後・晩）
83	小迫観音跡	丘陵斜面	寺院跡	中世（鎌倉）
84	西館館跡	丘陵	城館	中世（室町）
85	台畑遺跡	丘陵斜面	包含地跡	平安
86	荒崎館跡	丘陵	城館	中世
87	姉歯松古墳	〃	古墳	
88	佐野遺跡	〃	集落跡	奈良・平安
89	大林遺跡	自然堤防	包含地	平安
90	刈敷治郎遺跡	河川敷	〃	縄文（晩）・平安
91	竹ノ内遺跡	台地	〃	縄文
92	**大門遺跡**	〃	集落地	奈良・平安・中世
93	〃 〃	〃	〃	〃 〃
94	**狐塚遺跡**	〃	包含地	奈良・平安
95	〃 〃	〃	〃	〃 〃
96	熊谷遺跡	〃	集落地	縄文・古代
97	浦山館跡	丘陵		中世
98	平館跡	分離丘陵	城館	中世・近世
99	原貝塚	分離丘陵端	貝塚	縄文・（晩）
100	金成館跡（金成東・南・西館）	丘陵	城館	中世（室町）

第1表 遺跡地名表

番号	遺跡名	立地	種別	時代
101	倉沢遺跡	丘陵	包含地貝塚?	縄文
102	鳥見城跡	〃	城館	近世
103	大久保遺跡	〃	包含地	奈良・平安
104	鶴ケ城跡（御田鳥城）	〃	城館	中世・近世
105	有賀峯遺跡	丘陵中腹	集落跡	奈良・平安
106	新山遺跡	丘陵	包含地	縄文
107	軽石館跡	〃	城館	中世・近世
108	木売沢遺跡	丘陵麓	包含地	縄文（前）
109	田子屋館跡（田子屋館）	丘陵	城館	中世・近世
110	藤貫沢遺跡	〃	包含地	縄文・奈良・平安
111	八幡遺跡	〃	〃	縄文（前・中）
112	斐野館跡（有賀城）	〃	城館	中世
113	武鎗館跡（東・西館）	〃	〃	中世
114	大林館跡	自然堤防	〃	中世・近世
115	福岡館跡	自然堤防	〃	中世・近世

番号	遺跡名	立地	種別	時代
116	山王館跡	台地端	包含地城館	中世
117	城内古墳	台地	古墳	古墳（後）
118	新井山館跡（若柳城）	分離丘陵	城館	中世・近世
119	**糠塚遺跡**	台地	集落地	弥生・奈良・平安
120	荒町遺跡	〃	包含地	奈良・平安
121	柴の脇遺跡	沖積平野	〃	縄文（晩）・奈良・平安
122	八幡館跡	自然堤防	〃	縄文
123	大畑貝塚	台地	貝塚	縄文（中・後）
124	蓬田館跡	丘陵	包含地城館	縄文・中世
125	大立横穴古墳群	丘陵麓	横穴古墳	古墳（後）・奈良
126	夷穴古墳群	丘陵斜面	〃	縄文（後）
127	敷味貝塚	分離丘陵端	貝塚	縄文（後・晩）
128	有賀沢遺跡	丘陵頂	包含地	縄文（晩）
129	桜田館跡（亀井館）	〃	城館	中世
130	嘉倉貝塚	台地	貝塚	縄文（早・前）弥生（中・後）

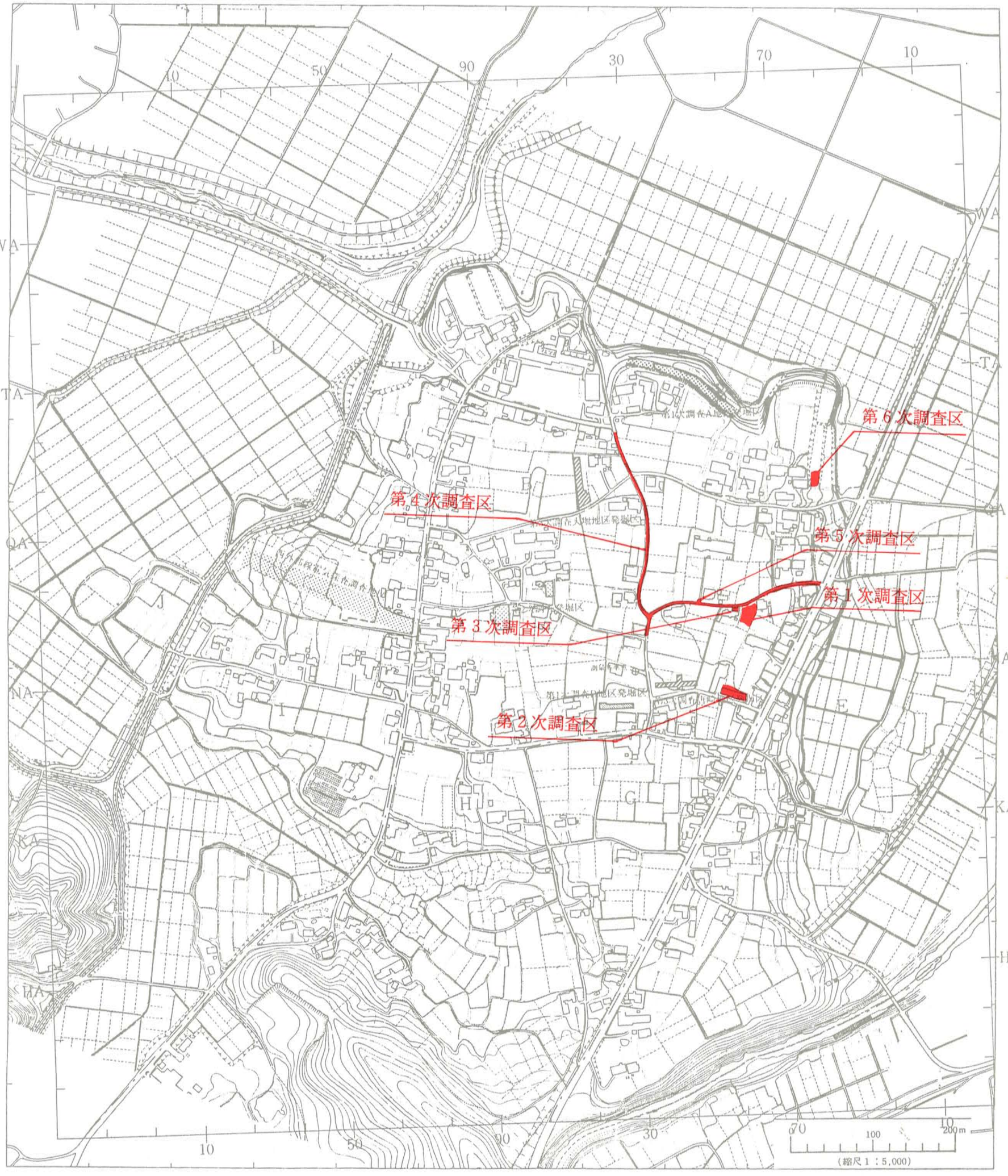


第3図　古代東北地方の主要な城柵

Ⅳ　伊治城および栗原郡に関する古代史年表

西　暦	和　暦	記　事	文　献
767	神護景雲1	10. 伊治城の造営なる。造営にたずさわった鎮守将軍田中多太麻呂らに叙位、外従五位下道嶋三山は従五位上を賜う。	続日本紀
768	2	12. 陸奥や他国の百姓で伊治・桃生に住みたいものの課役を免ずる。	続日本紀
769	3	1. 伊治・桃生にうつり住みたいものの課役を免ずる。	続日本紀
		2. 桃生・伊治に坂東8国の百姓を募り安置しようとする。	続日本紀
		6. 栗原郡をおく。これはもと伊治城である。（「続日本紀」では神護景雲元年11月乙巳条に収めるが錯簡とみられここでは神護景雲3年6月9日乙巳説をとる）	続日本紀
		6. 浮宕の百姓2,500人を伊治城に遷す。	続日本紀
780	宝亀11	3. 上治郡大領伊治公呰麻呂は牡鹿郡の大領道嶋大楯、按察使紀広純を伊治城で殺す。ついで多賀城にせまり府庫の物をとり放火する。	続日本紀
792	延暦11	1. 斯波村の夷胆沢阿奴志己らは帰服したいが伊治村の俘にさまたげられて果せないでいることを訴える。	類聚国史巻190
796	15	11. 伊治城と玉造塞の中間に1駅を置く。	日本後紀
		11. 相模・武蔵・上総・常陸・上野・下野・出羽・越後などの住民9,000人を伊治城に遷し置く。	日本後紀
804	23	11. 栗原郡に3駅をおく。	日本後紀
837	承和4	4. 3年春より百姓の妖言に奥邑の民が動揺し、栗原・賀美両郡の百姓多く逃亡する。また栗原・桃生以北の俘囚は反覆して定まらないので援兵1,000人を差発して非常に備える。	続日本後紀

西　暦	和　暦	記　　事	文　献
905	延　喜　5 （着　手）	延喜式 ○神名式　陸奥国１００座 栗原郡７座　大１座　表刀神社 小６座　志波姫神社 名大 神 雄鋭神社 駒形根神社　和我神社 香取御児神社 ○民部式　東山道・陸奥国大国 ……志太、栗原、磐井…… ○兵部式　陸奥国駅馬 ……玉造、栗原、磐井……各５疋	延　喜　式
931～938	承平年間	和名類聚抄　陸奥国 栗原郡（久利波良） （郷名）栗原・清水・仲村・会津	和名類聚抄
1062	康　平　5	8.　前９年の役で源頼義軍は、栗原郡営岡に到り、清原武則軍と合う。軍を編成し磐井郡中山に赴く。	陸奥話記
1189	文　治　5	8.7.　文治の役で源頼朝の奥羽攻めに対し、藤原泰衡自身は、国分原鞭楯（仙台市）に陣し、その後方栗原・三迫・黒岩口・一野辺には、若九郎大夫らを大将軍となし数兵の勇士を差しむけた。	吾　妻　鏡
		8.21.　頼朝軍は暴風雨をついて途中栗原・三迫などの要害による平泉方の抵抗を排しつつ松山道より津久毛橋に到る。	吾　妻　鏡
1190	建　久　1	2.12.　頼朝の征東に最後まで抵抗する大河次郎兼任と頼朝方の軍士、在国御家人らとが栗原の一迫で戦う。	吾　妻　鏡
		3.10.　栗原寺に逃げのびた兼任が樵夫らに殺害される。	吾　妻　鏡


第６次調査区
第４次調査区
第５次調査区
第１次調査区
第３次調査区
第２次調査区
WA
TA
QA
NA
KA
HA
(縮尺１：5,000)

第４図　調査区位置図

V　発見された遺構と遺物

第 1 次 調 査

所在地　城生野唐崎46―1

面　積　220㎡

期　間　昭和62年7月1日～8月12日

本年度の調査としては、当初より、農道儀平線の整備事業に伴う遺構確認調査（第5次調査）を予定していた。しかし、この農道は幅がきわめて狭いため、遺構のひろがりを面的に把握するという点では、やや無理があった。そこで、これを補うため、農道なかほどの南側隣接地に調査区を設定し、本調査を実施した。

調査前における本調査区の現状は、畑地である。この畑地は、耕作土が30cm～40cmの厚さで堆積しており、その下は直接地山となっている。そこで調査はまず重機を用いて耕作土を除去し、その後手掘りで遺構検出を行う方法をとった。

発見された遺構には竪穴住居跡5棟（ＳＩ58～62）、溝4条（SD63～66）、井戸1基（SE67）がある。このうち古代に属すると考えられるものは、竪穴住居跡であり、その他はこれより新しい時期のものとみられる。

住居跡の精査は検出した5棟のうち、3棟について実施した（ＳＩ58・60・61）。このなかでもＳＩ58住居跡は、床面の状況から火災に遭って廃絶したと考えられ、使用段階での土器の組成をそのままのかたちで把えることができた。このような火災住居跡の検出は、本遺跡では2例目である（宮城県多賀城跡調査研究所：1978.3）。

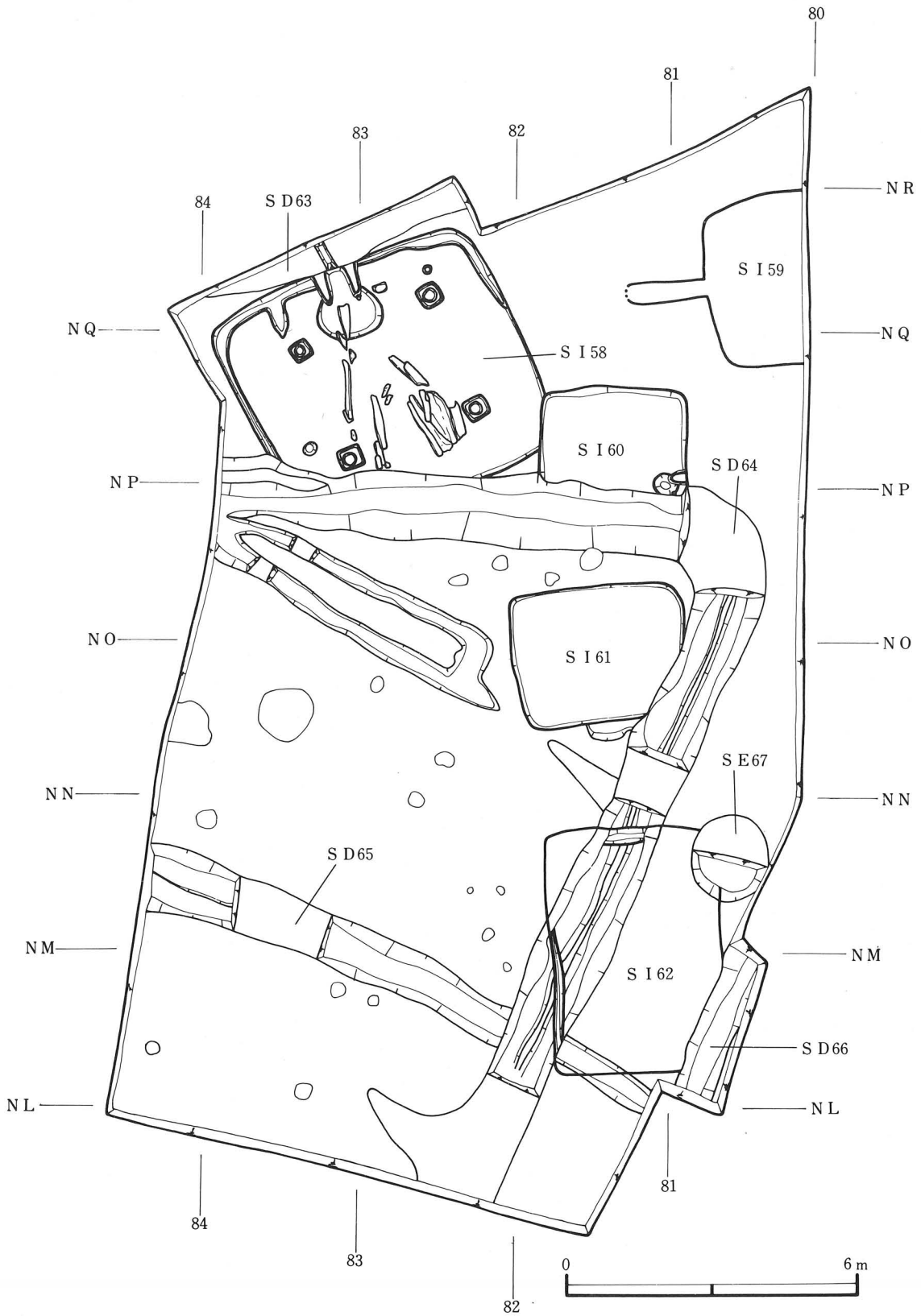
ＳＩ58住居跡

〔確認面〕　地山面で確認した。

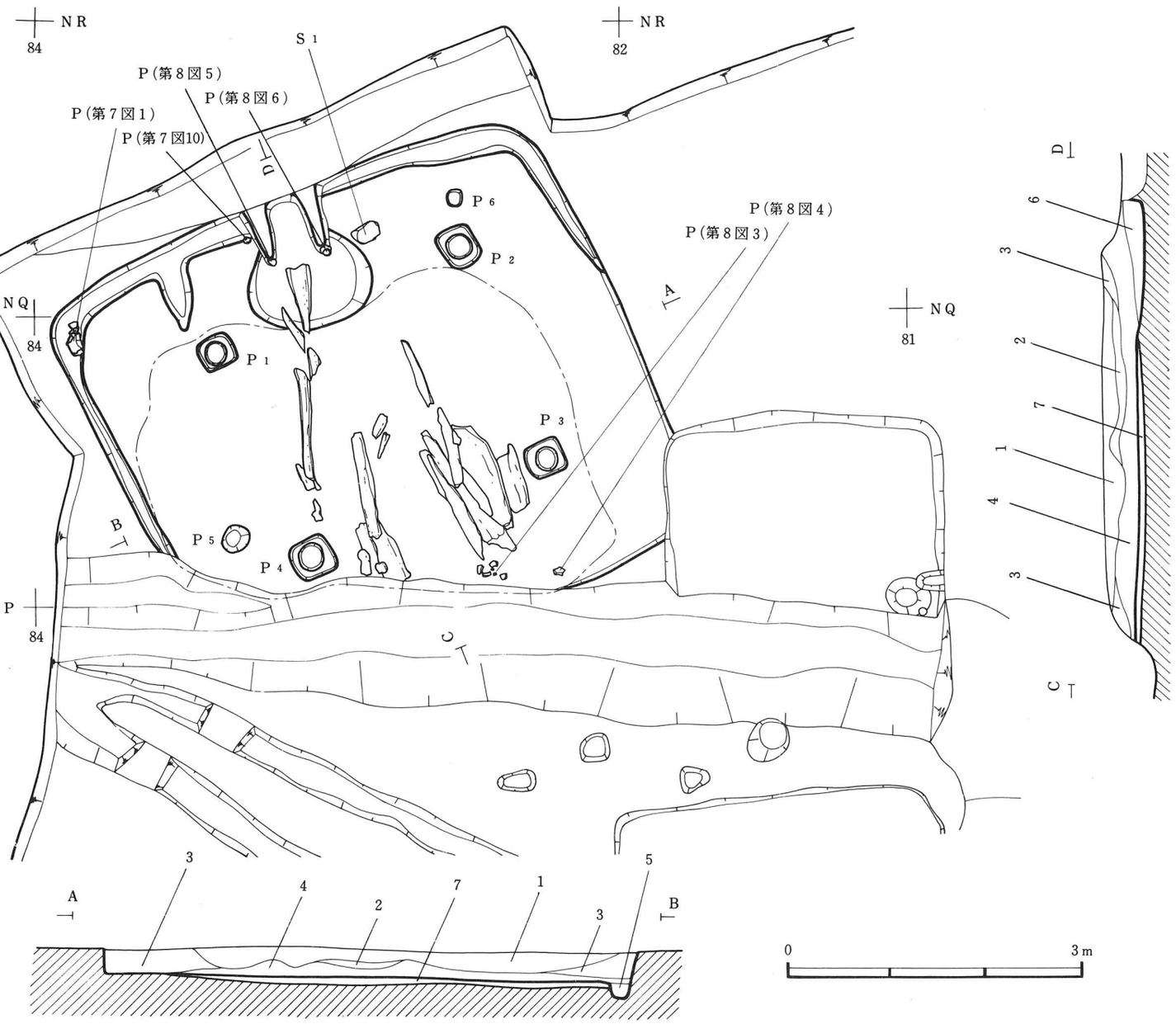
〔重複〕　ＳＩ60、ＳＤ63・64と重複し、これらによって一部が破壊されている。

〔平面形・規模〕　方形を呈する。各辺の中央部はややふくらみをもつ。規模は、南北4.8m以上、東西5.4m。

〔堆積土〕　堆積土は5層に大別された。第1層はしまりがあるかたい褐色のシルトで、住居跡の中央部に皿状に堆積している。第2層は壁際と住居跡中央に堆積する褐色のシルトである。



第５図　第１次調査区遺構配置図



層位	層No.	土色	土質	備考
第1層	1	褐色(10YR4/4)	シルト	
第2層	2	にぶい黄褐色(〃 4/3)	〃	しまりがなくやわらかい。均質。
	3	〃 (〃 4/3)	〃	〃
第3層	4	黒褐色(〃 3/2)	〃	火災によって形成された層。炭化材を多量に含んでいる。
第4層	5	暗褐色(〃 3/3)	〃	周溝内堆積土。
	6	〃 (〃 3/5)	〃	カマド内堆積土。焼土粒を多く含み、全体に赤味が強い。
第5層	7	黄褐色(〃 5/6)	粘土質シルト	住居貼床土。

第6図　SI68住居跡

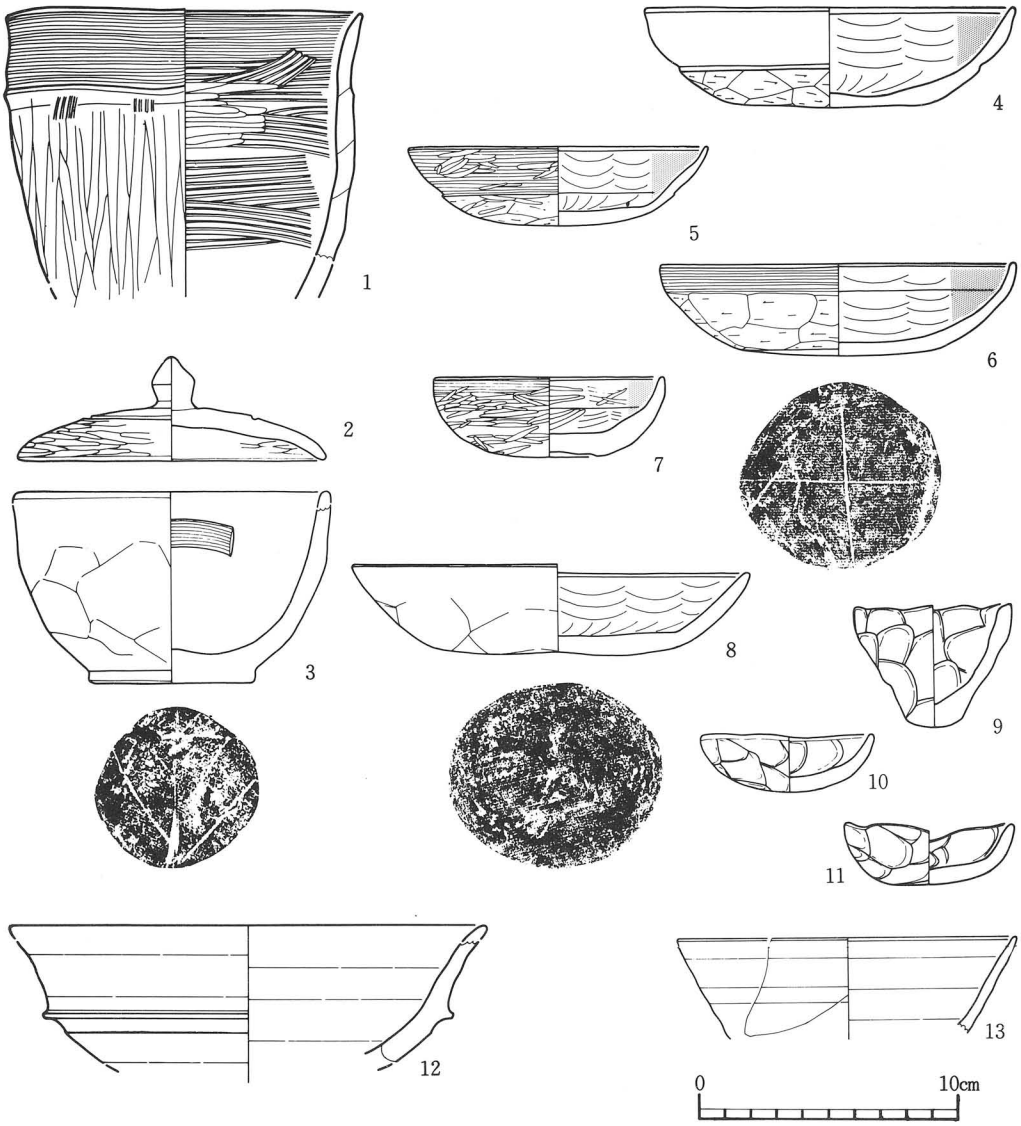
均質でしまりがなく、やわらかい。堆積状況からいずれも自然堆積層とみられる。第3層は暗褐色のシルトで夥しい量の炭化材を含み、直接床面を覆っている。とくにこの層の下面と床面との境からは、原形をとどめた材が折り重なった状態で多量に出土した。本層のこういった状況から、この住居跡は火災に遭って廃絶したことが知られる。また、第4層は、この第3層によって直接覆われたカマド内と周溝内の堆積層である。

〔壁〕　壁は急激な角度で立ち上がる。残存壁高は30cm～40cmある。

〔床面〕　やや凹凸があり、北から南にむかってわずかにレベルが下がる。貼床は北辺と東辺の一部を除き、ほぼ全面に5cm～10cmの厚さで認められた。一方、この貼床が及ばない部分は岩盤が露呈しており、かたくしまっていた。

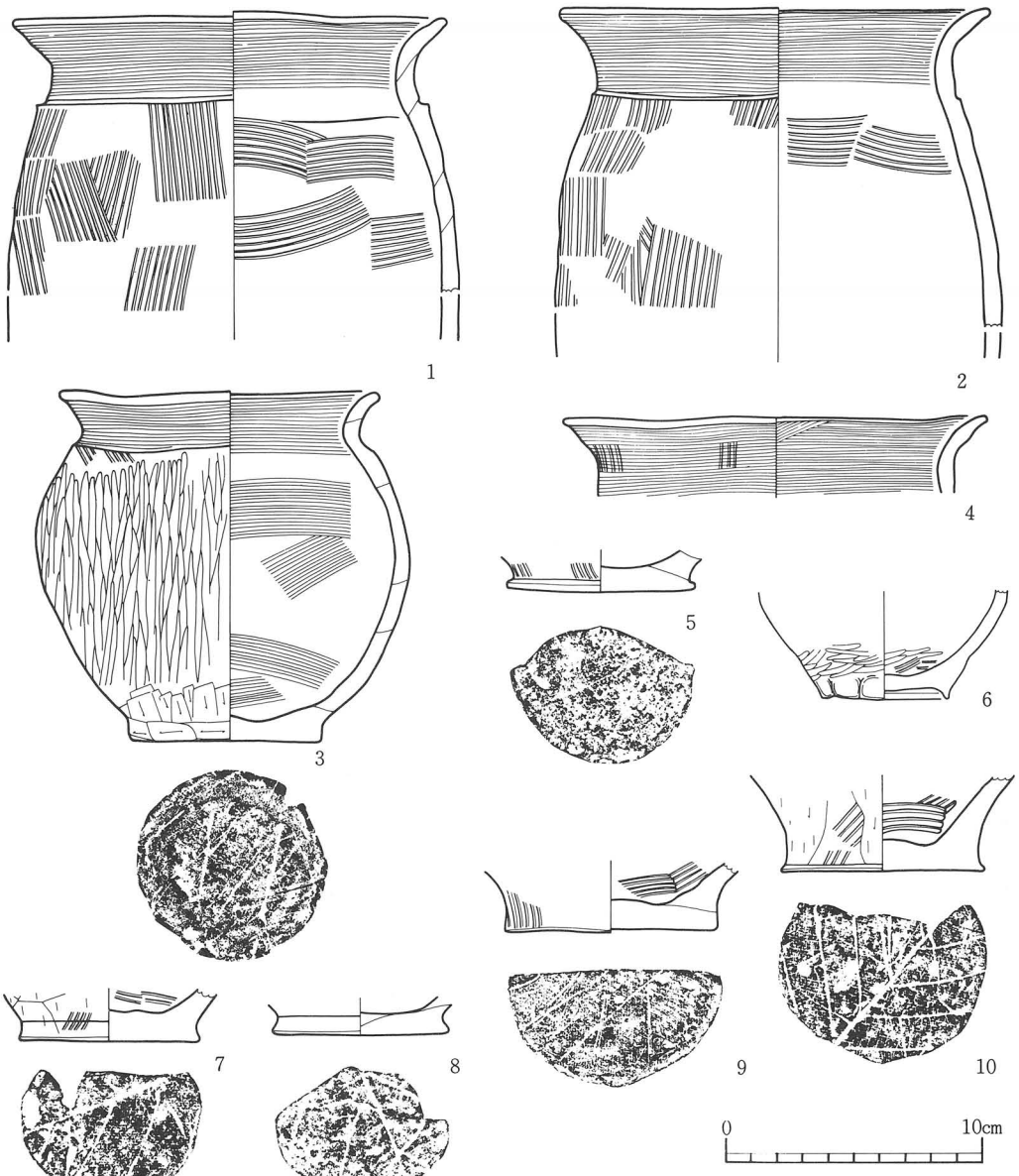
第2表　SI58住居跡出土遺物破片集計表

種別	器種	部位	器面調整 外面－内面	堆積土 1	2	3	4	5	6	床上	7	計(点)
土師器	坏	口縁部	ミガキ－ミガキ(黒色)	1			1					2
〃	〃	体部	ミガキ－ミガキ(黒色)					1				1
〃	〃	〃	ケズリ－不明							1		1
〃	〃	底部	ミガキ－ミガキ(黒色)				1					1
〃	〃	〃	ケズリ－ミガキ(黒色)							1		1
〃	甕	口縁部	ミガキ－ミガキ ケズリ－ナデ							1		1
〃	〃	〃	ヨコナデ－ヨコナデ	1						1		2
〃	〃	口頸部	ヨコナデ－ヨコナデ ハケメ－ハケメ					3		2		5
〃	〃	頸部	ヨコナデ－ヨコナデ	1								1
〃	〃	体部	ミガキ－ハケメ				2			4		6
〃	〃	〃	ケズリ－ヘラナデ					2				2
〃	〃	〃	ケズリ－ハケメ	2			1					3
〃	〃	〃	ケズリ ハケメ－ハケメ					40				40
〃	〃	〃	ケズリ－ナデ							3		3
〃	〃	〃	ハケメ－ハケメ	7				10		4		21
〃	〃	〃	ハケメ－ナデ	2			2					4
〃	〃	〃	ハケメ－ヘラナデ	2			1					3
〃	〃	〃	ハケメ－不明	2						1		3
〃	〃	〃	ナデ－ケズリ	1								1
〃	〃	〃	ナデ－ハケメ	1				7				8
〃	〃	〃	ナデ－ヘラナデ	1								1
〃	〃	〃	不明－ハケメ	3			4					7
〃	〃	〃	不明－ナデ					6				6
〃	〃	〃	不明－不明	1			7			3		11
〃	〃	底部	ハケメ－ハケメ					2				2
〃	〃	〃	ケズリ 木葉痕－ヘラナデ				2					2
〃	〃	〃	ケズリ 木葉痕－ハケメ	1								1
〃	〃	〃	ナデ 木葉痕－ヘラナデ							1		1
〃	〃	〃	不明－不明							1		1
〃	蓋	口端部	ミガキ－ミガキ					4				4
〃	不明	体	ハケメ－不明				1					1
計(点)				26			22	75		23		146
須恵器	坏	体部	ロクロナデ－ロクロナデ	1								1
〃	蓋	体部	ロクロナデ 回転ヘラケズリ－ロクロナデ				1					1
計(点)				1			1					2
総計(点)												148



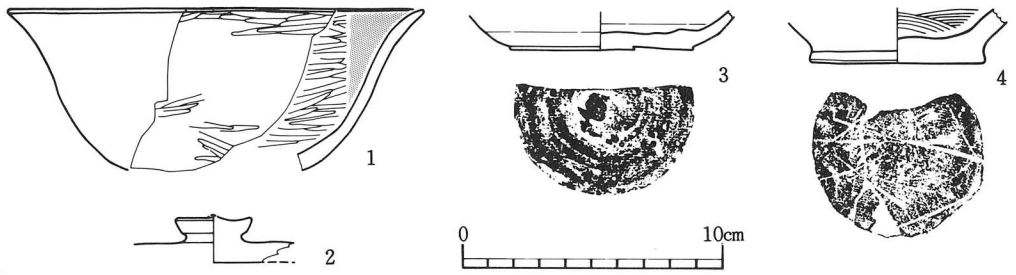
No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No.
1	土師器	甕	SI58	5上		13.3		ヨコナデ	ミガキ 一部ハケメ		ヨコナデ			C－1
2	〃	蓋	〃	6	4.1	(6.0)		ミガキ	ミガキ		ミガキ	ミガキ		C－2
3	〃	鉢	〃	〃	7.5	(12.3)	6.2		ケズリ	木葉痕		ヘラナデ		C－3
4	〃	坏	〃	〃	3.9	(14.4)	(7.0)			ケズリ	ミガキ 黒色	ミガキ 黒色	ミガキ 黒色	C－4
5	〃	〃	〃	〃	3.1	(11.7)		ヨコナデ ミガキ		ケズリ ミガキ	〃	〃	〃	C－5
6	〃	〃	〃	〃	3.6	13.8	7.5	ヨコナデ ミガキ	ケズリ ミガキ	ケズリ ミガキ	〃	〃	〃	C－6
7	〃	〃	〃	〃	3.1	9.0		〃	ケズリ のちミガキ	ケズリ のちミガキ	〃	〃	〃	C－7
8	〃	〃	〃	〃	3.4	15.4	9.5	ミガキ	ケズリ	ケズリ	〃	〃	〃	C－8
9	手づくね		〃	〃	(4.7)	(6.2)		指オサエ	指オサエ	指オサエ	指オサエ	指オサエ	指オサエ	A－1
10	〃		〃	床面	2.2	6.8		〃	〃	〃	〃	〃	〃	A－3
11	〃		〃	6	2.3	6.6		〃	〃	〃	〃	〃	〃	A－4
12	須恵器	坏	〃	床面		(18.5)		ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ		E－1
13	〃	〃	〃	6		(13.2)		〃	〃		〃	〃		E－2

第7図　SI58住居跡出土遺物(1)



No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量			外面			内面			登録No.
					器高	口径	底径	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	
1	土師器	甕	SI58	6		16.8		ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ	ハケメ		C－9
2	〃	〃	〃	床面		16.7		〃	〃		〃	〃		C－10
3	〃	〃	〃	床面	13.8	12.4	7.5	〃	ミガキ一部ハケメ	ナデ	〃	ナデ	ナデ	C－11
4	〃	〃	〃	床面		(16.5)		〃			〃			C－12
5	〃	〃	〃	カマド側壁			7.2		ハケメ	木葉痕ナデ			ナデ	C－13
6	〃	〃	〃	〃		5.1			ミガキ	指オサエ		ハケメのちミガキ	ハケメのちミガキ	C－14
7	〃	〃	〃	6			7.0		ハケメケズリ	木葉痕			ハケメ	C－15
8	〃	〃	〃	〃			(7.0)			〃				C－16
9	〃	〃	〃	〃			8.3		ハケメ	〃		ハケメ	ハケメ	C－17
10	〃	〃	〃	〃			8.0		ハケメケズリ	〃		〃	〃	C－18

第8図　SI58住居跡出土遺物(2)



No.	種別	器種	出土遺構	層位	法量			外面			内面			登録No.
					器高	口径	底径	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	
1	土師器	坏	SI58	1		(16.1)		ミガキ	ミガキ		ミガキ	ミガキ		C－19
2	須恵器	蓋	〃	1					ロクロナデ			ロクロナデ		E－3
3	〃	坏	〃	1			7.0		〃	回転ヘラ切り		〃	ロクロナデ	E－4
4	土師器	甕	〃	1			6.8			木葉痕			ナデ	C－20

第9図　SI58住居跡出土遺物(3)

〔柱穴〕　計4基検出された。掘り方は一辺40cmほどの方形を呈し、柱痕は径20cmある。これらは対角線上に配置されている。柱穴間の距離は、東西間で2.7m、南北間で2.3mである。

〔カマド〕　カマドは北壁中央部に付設されている。燃焼部のみが検出され、煙道部はSD64によって破壊されていた。検出された燃焼部の規模は、幅80cm、奥行70cmである。底面は前方に大きく張り出して浅く皿状に凹んでいる。ここには焼土の厚い堆積がみられた。

また、両側壁の先端部には、補強として土師器甕の底部が据えられている（第8図5・6）。

〔周溝〕　壁沿いに巡るが、東辺はなかほどで途切れてしまう。また、これに続く南辺でも検出された範囲内では確認できなかった。規模は、幅30cm～40cm、深さ10cm～25cmである。断面形はU字形をなす。

なお、この周溝は、前述したように火災によって形成された第3層に直接覆われていることから、住居廃絶の直前には、既に埋まりきっていたことになる。

〔その他〕　カマド東脇の床面上に自然石が据えられている（S_1）。大きさは30cm×20cmあり、表面は赤変してもろくなっている。おそらくカマドと関連する施設であろう。

また、この他にも床面上から掘り込まれた径20cm～30cmのピットが2基検出された（P_5・P_6）。これらの性格については判然としない。

〔出土遺物〕　遺物は、土師器坏・蓋・鉢・甕、須恵器坏、手づくね土器が出土した。数量的には土師器が圧倒的に多く、須恵器と較べて際立った違いをみせている。

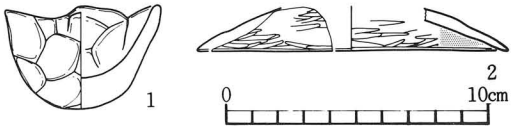
このうち住居の年代決定資料となり得るものには、床面、周溝内堆積土（層No.5）上面、カマド内堆積土（層No.6）から出土した23点がある（第7・8図）。これらはいずれも火災によって形成された第3層に直接覆われており、住居廃絶の時点において同時に存在していたことが知られる。とくに、カマド内からは、狭い範囲のなかでかなりまとまった量が出土しており、強い

共伴関係を示している（第７図２～９・13、第８図１・４・７～10）。

ＳＩ59住居跡

地山面で確認した。調査は上面確認に留めており、未精査である。規模は南北3.3m、東西2.0m以上あり、方形を呈する。カマドは西壁の中央部に付設されている。煙道部は細長く、幅40cm、長さ1.5mある。

遺構検出の段階で、内面が黒色処理された土師器蓋と手づくね土器が、各一



No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量			外面			内面			登録No.
					器高	口径	底径	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	
1	手づくね		ＳＩ59	1	4.0	6.0		指オサエ	指オサエ	指オサエ	指オサエ	指オサエ	指オサエ	Ａ－4
2	土師器	蓋	〃	1		(12.0)		ミガキ黒色	ミガキ黒色		ミガキ	ミガキ		Ｃ－21

第10図　ＳＩ59住居跡出土遺物

点づつ出土した（第10図）。

ＳＩ60住居跡

〔確認面〕　地山面で確認した。

〔重複〕　本住居跡は、ＳＩ58住居跡の堆積土の一部を切って構築されている。一方、本住居跡の南半部は、ＳＤ64によって大きく破壊されており、この重複した部分での堆積土はほとんどが失われていた。しかし、住居跡南辺の堆積土については、ＳＤ64の壁に帯状に残っていた（第11図）。

〔平面形・規模〕　平面形は方形を呈する。規模は、南北3.0ｍ、東西2.8ｍ。

〔堆積土〕５層認められた。第１層は住居跡の中央部に皿状に堆積する黒褐色のシルトである。第２層は暗褐色のシルトで、地山ブロックを比較的多く混じえ、壁際に堆積している。第３層は、地山ブロックをわずかに混じえる黒褐色のシルトである。第４層は明黄褐色の均質なシルトで、西壁際から床面中央に向かって倒れ込んだようにして堆積している。この状況からみて、壁の崩落土ではないかと考えられる。第５層は黒褐色のシルトで、壁際に貼りつくようにして薄く堆積している。

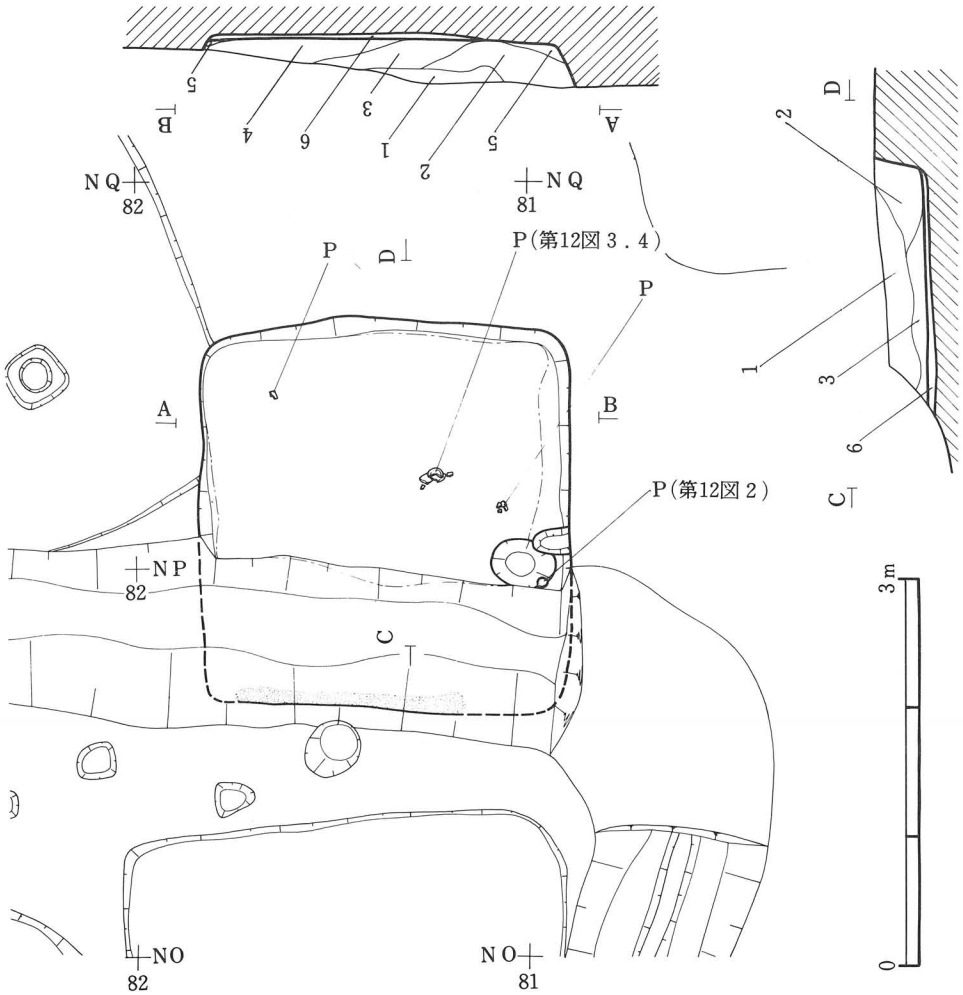
〔壁〕　西壁の立ち上がりは急であるが、他は比較的ゆるやかな角度で立ち上がる。残存壁高は、35cm～40cmある。

〔床面〕　平坦で凹凸がない。東壁周辺を除き、ほぼ全面に５cm～10cmの厚さで貼床されている。

〔柱穴〕　認められない。

〔カマド〕　東壁の中央やや南寄りに付設されている。ＳＤ64によって煙道部は完全に破壊されており、燃焼部の南側壁も、先端に据えられた補強の土師器甕を除き、ほとんどが失われていた。残存していた北側壁は、住居壁にとりついており、規模は、幅20cm、長さ30cmある。底面は浅く皿状に凹み、２cm～３cmの厚さで白色粘土が貼られている。

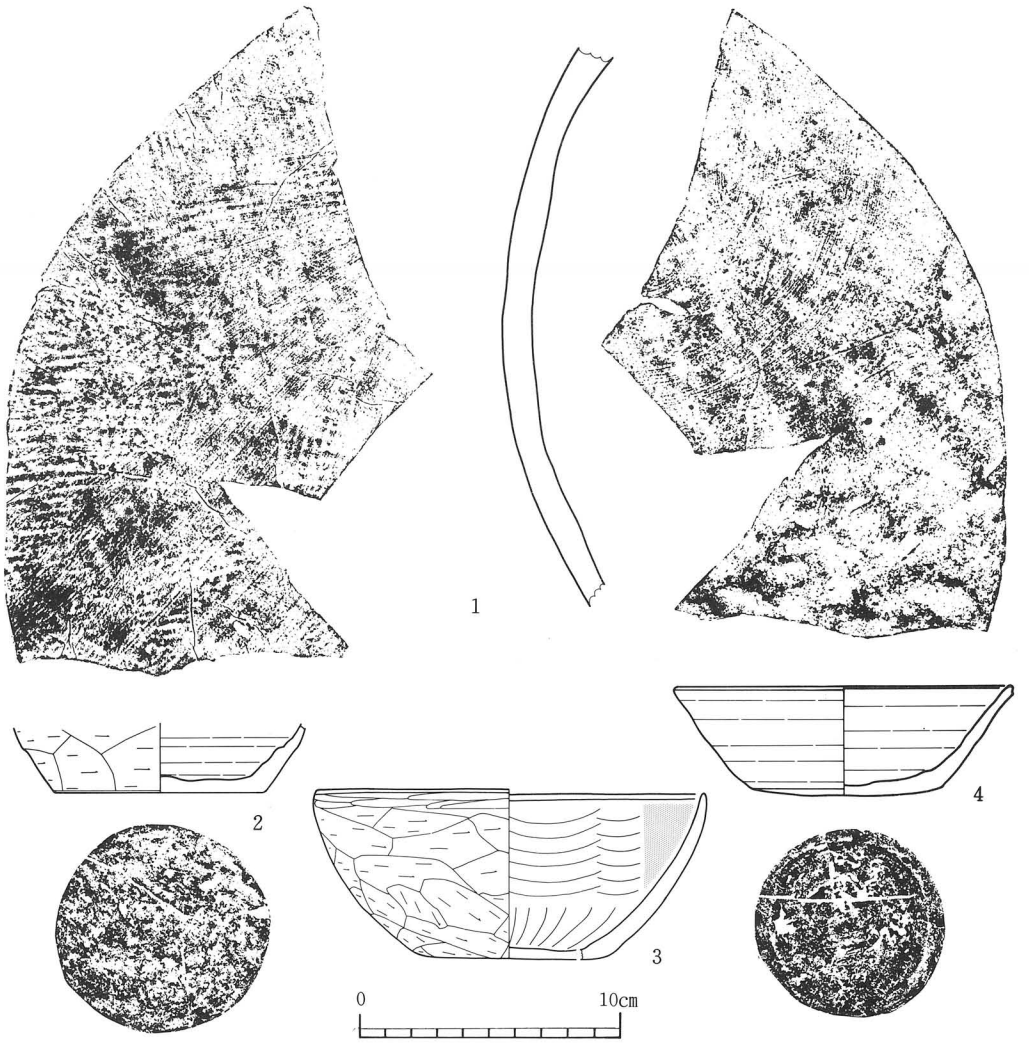
〔周溝〕　認められない。



層位	層No.	土色	土質	備考
第１層	1	黒褐色(10YR２／３)	シルト	砂質でしまりがなく、やわらかい。
第２層	2	暗褐色(〃　３／３)	〃	地山ブロックを中量混じえる。ややしまりあり。
第３層	3	黒褐色(〃　２／３)	粘土質シルト	粘性・しまりがある。
第４層	4	明黄褐色(〃　７／６)	シルト	壁の崩壊土とみられる。
第５層	5	黒褐色(〃　２／２)	〃	
第６層	6	明黄褐色(〃　２／３)	粘土質シルト	住居貼床土。比較的やわらかい。

第11図　ＳＩ60住居跡

〔出土遺物〕　出土遺物には、土師器坏・甕、須恵器坏・高台付坏・甕がある（第12・13図）。このうち住居の年代決定資料となり得るものは、第12図に示した４点である。これらには、住居床面（３・４）、カマド底面（１）から出土したもの、それにカマドの補強として用いられたもの（２）がある。３・４は床面上に重ねられた状態で出土した。

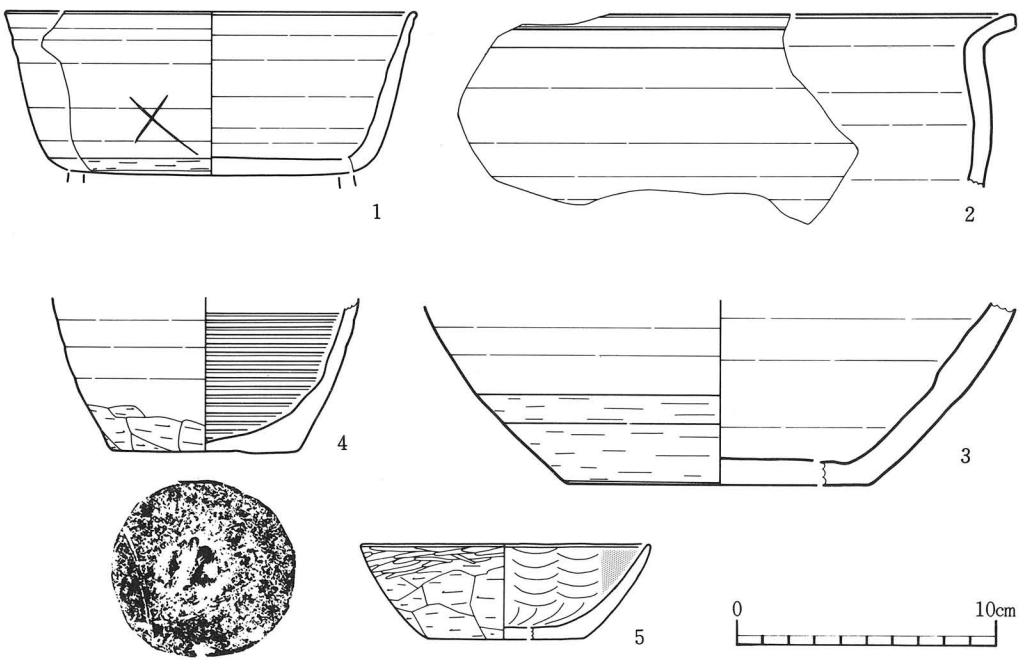


No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量			外面			内面			登録No.
					器高	口径	底径	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	
1	須恵器	甕	SI60	カマド底面					平行叩き目ナデ			ナデ		忘－5
2	土師器	〃	〃	カマド側壁			8.1		ロクロナデケズリ	手持ケズリ		ロクロナデ	ロクロナデ	D－1
3	〃	坏	〃	床面	6.5	15.1	7.1	ミガキ	ケズリ	ケズリ	ミガキ黒色	ミガキ黒色	ミガキ黒色	C－22
4	須恵器	〃	〃	〃	4.3	13.2	7.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切りナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－6

第12図　SI60住居跡出土遺物(1)

第３表　S160住居跡出土遺物破片集計表

種別	器種	部位	器面調整 外面 — 内面	堆積土 1	2	3	4	5	床上	6	計(点)
土師器	坏	口縁部	ロクロナデ — ミガキ(黒色)	1							1
〃	〃	体部	ロクロナデ — ミガキ(黒色)						1		1
〃	甕	口縁部	ヨコナデ — ヨコナデ	1					1		2
〃	〃	体部	ケズリ — ヘラナデ	2							2
〃	〃	〃	ケズリ — 不明	1							1
〃	〃	〃	ハケメ — ハケメ		1						1
〃	〃	〃	ハケメ — ヘラナデ		2	1			2		5
〃	〃	〃	ハケメ — 不明						1		1
〃	〃	〃	ナデ — ヘラナデ						1		1
〃	〃	〃	不明 — ナデ						2		2
〃	〃	〃	不明 — ヘラナデ			1					1
〃	〃	〃	不明 — ハケメ		3						3
〃	〃	〃	不明 — 不明	6	3						9
〃	〃	体～底部	ケズリ — 不明						1		1
〃	〃	〃	ナデ木葉痕 — ハケメ	1							1
計 (点)				12	9	2			9		32
須恵器	坏	口縁部	ロクロナデ — ロクロナデ	1		1			1		3
〃	甕	体部	平行タタキメ — 同心円文アテメ	1							1
〃	〃	〃	平行タタキメ — ロクロナデ	1							1
計 (点)				3		1			1		5
総計 (点)											37



No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量 器高	口径	底径	外面 口縁部	体部	底部	内面 口縁部	体部	底部	登録No.
1	須恵器	坏	S I 60	1	(6.4)	(15.8)	(10.9)	ロクロナデ	ロクロナデ 回転ケズリ		ロクロナデ	ロクロナデ		E － 7
2	〃	甕	〃	1				〃	ロクロナデ		〃	〃		D － 2
3	〃	〃	〃	1			(11.6)		ロクロナデ 回転ケズリ	回転ケズリ		〃	ロクロナデ	E － 8
4	土師器	〃	〃	3			7.0		ロクロナデ 手持ケズリ	回転ヘラ切り		回転ハケメ	回転ハケメ	D － 3
5	〃	坏	〃	3	4.8	11.2	6.0	ミガキ	ケズリ	ケズリ	ミガキ黒色	ミガキ黒色	ミガキ黒色	C － 23

第13図　S160住居跡出土遺物(2)

S I 61住居跡

〔確認面〕　地山面で確認した。

〔重複〕　SD64溝と重複し、これによって南東隅が破壊されている。

〔平面形・規模〕　ややゆがんだかたちの東西に長い長方形を呈する。規模は、南北2.6m、東西3.3mある。

〔堆積土〕　大別して4層ある。第1層は、しまりがなくやわらかい黒褐色のシルトで、住居跡の中央部を中心にして皿状に堆積している。第2層は黄褐色のシルトで、住居跡の全域にわたって堆積する。第3層は、東壁中央一帯にのみ局部的に分布する、炭と焼土を多量に混じえる層である。第4層は炭化物をわずかに含み、貼床上面を覆う黒褐色のシルトである。

〔壁〕　各壁とも急激な角度で立ち上がる。残存壁高は、20cm～25cmある。

〔床面〕　若干凹凸はあるが、比較的平担である。上面は汚れており、各所に形状をとどめない木炭片が分布していた。貼床は東辺と南辺の一部を除き、ほぼ全面に5cm～10cmの厚さで施されている。

〔柱穴〕　認められない。

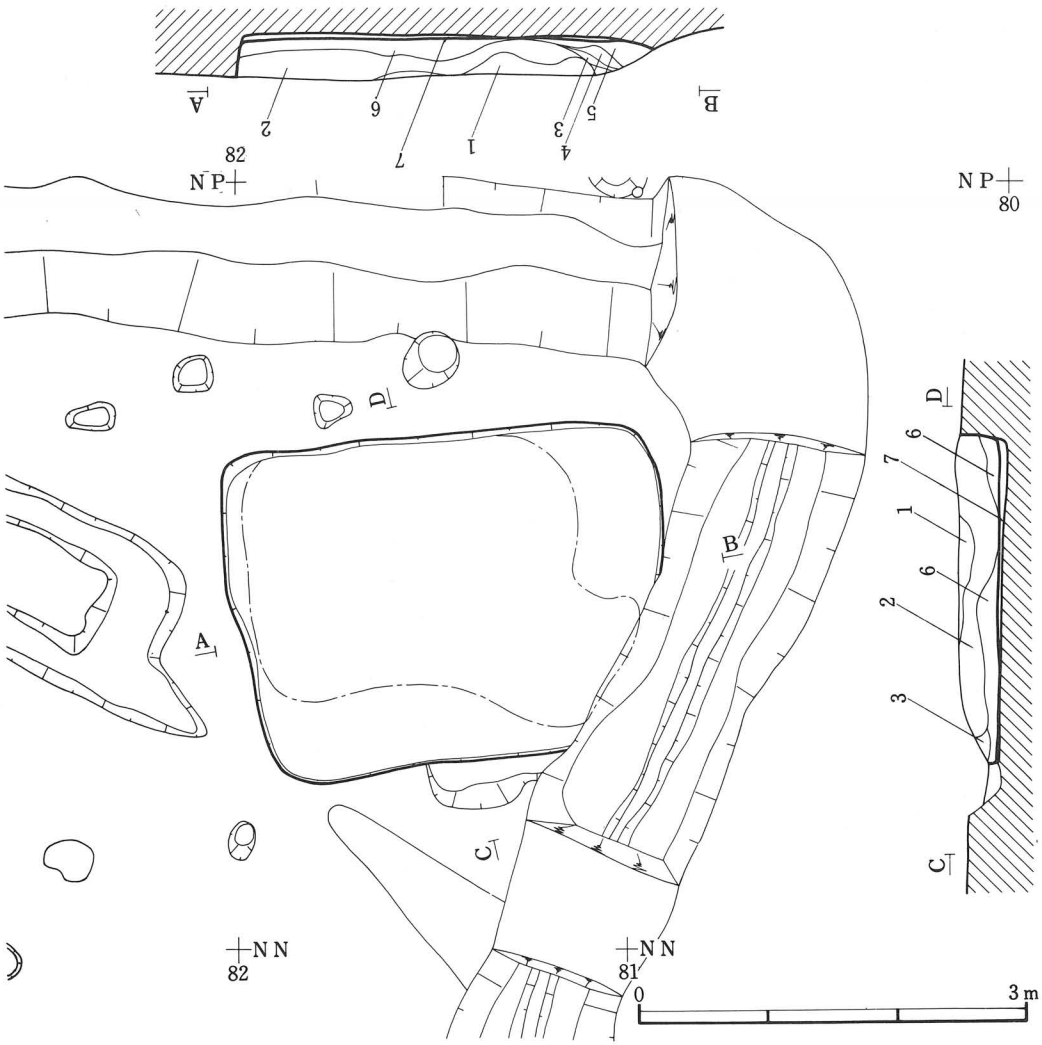
〔カマド〕　確認できなかった。しかし、東壁中央付近には、焼土や炭の分布が集中していることから、ここに付設されていた可能性がある。

第4表　S161住居跡出土遺物破片集計表

種別	器種	部位	器面調整 外面 — 内面	堆積土 1	2	3	4	5	6	床上	7	計(点)
土師器	甕	口縁部	ヨコナデ — ヨコナデ	2						1		3
〃	〃	口頸部	不明 — 不明			1						1
〃	〃	体部	ケズリ — ヘラナデ	3				5				8
〃	〃	〃	ケズリ — ハケメ		2							2
〃	〃	〃	ケズリ — 不明	3								3
〃	〃	〃	ハケメ — ハケメ	1								1
〃	〃	〃	ハケメ — 不明					1				1
〃	〃	〃	ナデ — ナデ	1								1
〃	〃	〃	ナデ — ヘラナデ	2				2				4
〃	〃	〃	不明 — ハケメ		1							1
〃	〃	〃	不明 — ナデ	2								2
〃	〃	〃	不明 — 不明	1	4							5
〃	〃	体～底部	ケズリ→木葉痕 — ヘラナデ					1				1
〃	〃	底部	ケズリ→木葉痕 — ハケメ	1								1
計			(点)	16	7	1		9		1		34
須恵器	坏	口縁部	ロクロナデ — ロクロナデ	1						1		2
〃	〃	底部	回転ヘラ切リ — ロクロナデ	1								1
〃	甕	体部	平行タタキメ — 同心円文アテメ	1								1
計			(点)									4
弥生土器	不明	口縁部	沈線文 — ナデ			1						1
計			(点)									1
手づくね		体部	オサエ — オサエ		1							1
計			(点)	3	1	1				1		1
総計			(点)									40

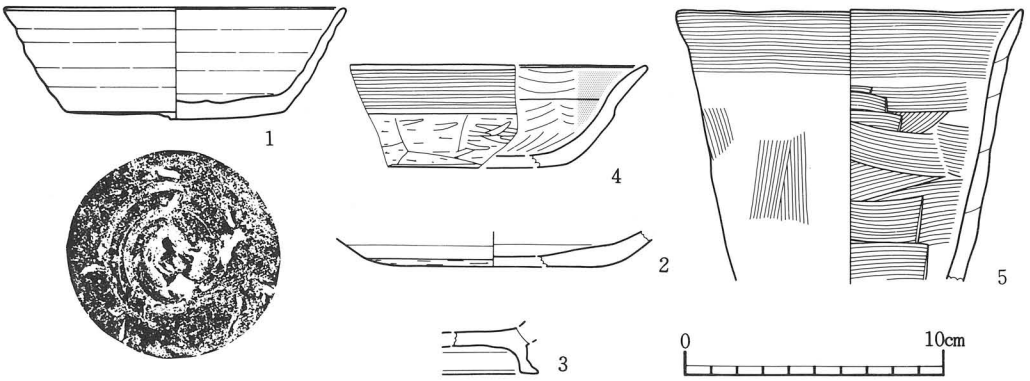
〔周溝〕　認められない。

〔出土遺物〕　遺物は全体に少なく、出土傾向にもとくにまとまりはみられない。図示可能ものには、土師器坏・甕、須恵器杯・高台付坏がある（第15図）。



層位	層No.	土色	土性	備考
第1層	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	やわらかくしまりがない。
第2層	2	にぶい黄褐色(〃 4/3)	〃	地山ブロックを多量に混じえる。
第3層	3	明黄褐色(〃 6/6)	〃	東辺中央一帯にのみ、局部的に堆積する。
	4	赤褐色(5YR4/6)	〃	焼土を多量に含む。
	5	明黄褐色(10YR6/6)	〃	
第4層	6	黒褐色(〃 2/3)	粘土質シルト	粘性・しまりがある。地山ブロックを中量、炭化物をわずかに混じえる。
第5層	7	明黄褐色(5YR4/5)	〃	住居貼床土。

第14図　ＳＩ61住居跡



No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量			外面			内面			登録No.
					器高	口径	底径	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	
1	須恵器	坏	SI61	1	4.3	(13.2)	(8.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り		ロクロナデ	ロクロナデ	E－9
2	〃	〃	〃	1			(8.0)		〃	回転ケズリ		〃	〃	E－10
3	〃	高台付坏	〃	2						ロクロナデ			〃	E－11
4	土師器	坏	〃	1				ヨコナデ	ケズリ ミガキ		ミガキ 黒色	ミガキ 黒色		C－24
5	〃	甕	〃	床面		(13.4)		〃	ナデ		ヨコナデ	ヘラナデ		C－25

第15図　SI61住居跡出土遺物

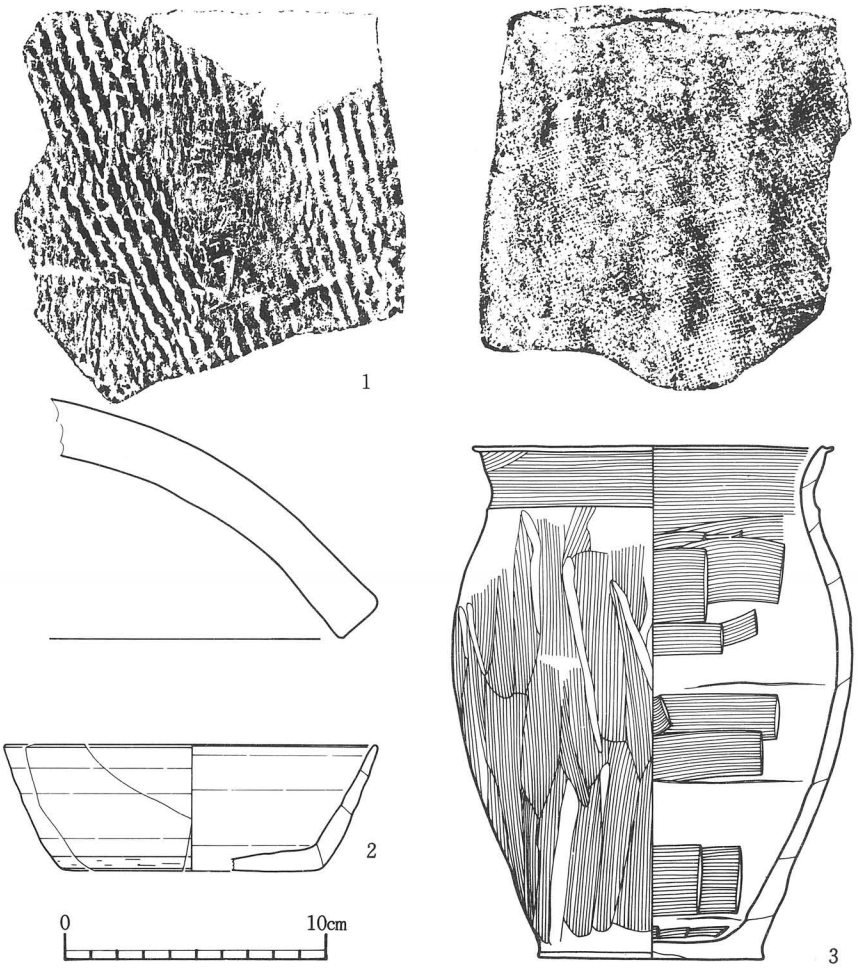
SI62住居跡

地山面で確認した。SD64～66とSE67に重複し、これらによって一部が破壊されている。規模は、南北4.7m、東西3.3mあり、南北に長い長方形を呈する。本住居跡は調査を上面確認に留めている。したがって、床面や施設の詳細については判然としない。ただし周溝は、SD64と重複する部分において、その一部を確認することができた。これは、SD64溝の底面と本住居跡の底面とが、ほぼ同じレベルであったためである。ここで確認できた周溝は、幅20cm～30cm、深さ4cm～15cmあり、断面形はU字形をなす。

遺物はSD64によって破壊された断面から、土師器甕、須恵器坏、平瓦が出土した（第16図）。これらは断面から採集したものであるため、層位的な点については明確でない。

第5表　SI62住居跡出土遺物破片集計表

種別	器種	部位	器面調整 外面－内面	堆積土 1	計 (点)
土師器	坏	口縁部	ロクロナデ ミガキ－ミガキ(黒色)	1	1
〃	甕	口縁部	ヨコナデ－ヨコナデ	1	1
〃	〃	口頸部	ヨコナデ ナデ－ヨコナデ ヘラナデ	1	1
〃	〃	体部	ミガキ－ハケメ	3	3
〃	〃	〃	ミガキ－不明	1	1
〃	〃	〃	ケズリ－ナデ	3	3
〃	〃	〃	ケズリ－ヘラナデ	1	1
〃	〃	〃	ハケメ－ハケメ	3	3
〃	〃	〃	ナデ－ナデ	1	1
〃	〃	〃	ナデ－ハケメ	2	2
〃	〃	〃	不明－ナデ	1	1
〃	〃	〃	不明－ハケメ	1	1
〃	〃	〃	不明－不明	3	3
〃	〃	底部	木葉痕－不明	1	1
〃	〃	〃	木葉痕 ケズリ－ハケメ	1	1
計 (点)				24	24
須恵器	甕	体部	ロクロナデ－ロクロナデ	1	1
〃	〃	〃	不明－不明	1	1
〃	〃	底部	回転ヘラ切り－ロクロナデ	1	1
〃	坏	体部	ケズリ－ミガキ(黒色)	2	2
計 (点)				5	5
総計 (点)					29



No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量			外面			内面			登録No.
					器高	口径	底径	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	
1	平瓦		SI62	1					縄叩き目 凹型台圧痕			布目 凸型台圧痕		G－1
2	須恵器	坏	〃	〃	4.9	(14.4)	(9.8)	ロクロナデ	ロクロナデ 回転ケズリ	回転ケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－12
3	土師器	甕	〃	〃	20.0	13.8	8.7	ヨコナデ	ナデ 一部ナデツケ	ケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	C－26

第16図　SI62住居跡出土遺物

SD63～66溝

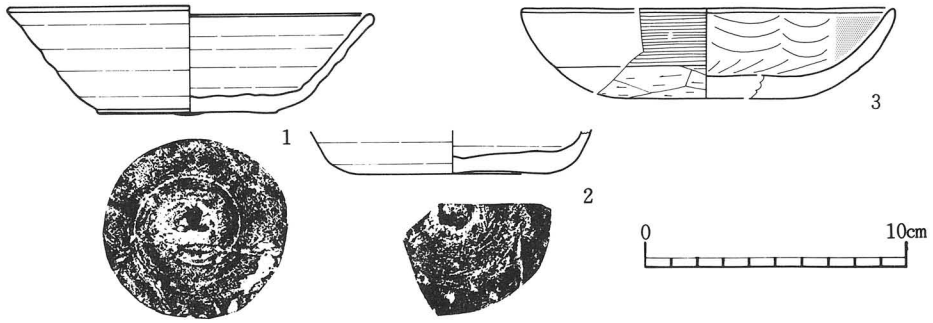
本調査区からは4条の溝が検出された。これらはいずれも住居跡を破壊しており、埋土もしまりがなく全体的にやわらかい。このような点からみて、住居跡が構築された年代からは、かなり遅れた時期のものとみられる。しかし、それを具体的に特定できるような遺物の出土はなかった。

第6表　SD66溝出土遺物破片集計表

種別	器種	部位	器面調整	堆積土	計
			外面－内面		
土師器	甕	口縁部	ヨコナデ－ヨコナデ	1	1
計			(点)		1
須恵器	坏	口縁部	ロクロナデ－ロクロナデ	1	1
計			(点)		1

第７表　ＳＤ64溝出土遺物破片集計表

種別	器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	堆積土 1	計 (点)
土師器	坏	口縁部	ミガキ	ミガキ(黒色)	1	1
〃	甕	頸部	ヨコナデ	ヨコナデ	1	1
〃	〃	体部	ケズリ	ハケメ	2	2
〃	〃	〃	ハケメ	ハケメ	4	4
〃	〃	〃	不明	ハケメ	1	1
〃	〃	〃	不明	不明	5	5
計 (点)					14	14
須恵器	坏	体～底部	ロクロナデ 回転ヘラ切り→手持ケズリ	ロクロナデ	1	1
〃	〃	〃	ロクロナデ 静止糸切り→手持ケズリ	ロクロナデ	1	1
〃	甕	体部	平行タタキメ	同心円文アテメ	3	3
〃	〃	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	2	2
〃	〃	高台部	ロクロナデ	ロクロナデ	1	1
〃	蓋	口端部	ロクロナデ	ロクロナデ	1	1
〃	〃	体部	回転ケズリ	ロクロナデ	1	1
計 (点)					10	10
総計 (点)						24



No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No.
1	須恵器	坏	ＳＤ64	1	4.0	14.1	(6.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	Ｅ－13
2	〃	〃	ＳＤ66	〃			(7.2)		〃	回転ヘラ切りナデ		〃	〃	Ｅ－14
3	土師器	〃	〃	〃	7.6	(14.4)	(7.6)	ヨコナデ	ケズリ	ケズリ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	Ｃ－27

第17図　ＳＤ64・66出土遺物

ＳＥ67井戸

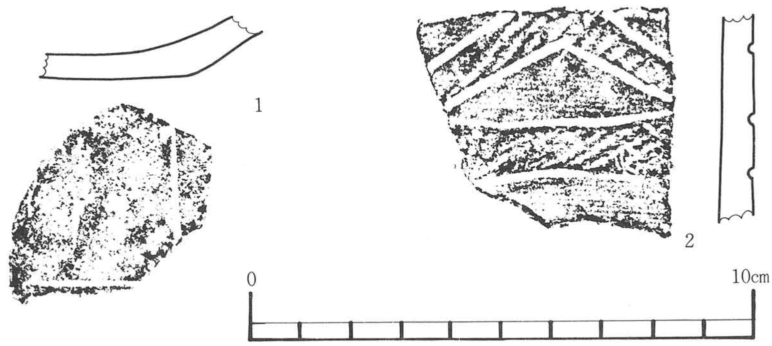
径1.5mを測る円形の素掘りの井戸である。ＳＩ62住居跡の北東隅を破壊している。１ｍほど掘り下げたところで、近世のものと思われる磁器の椀が、１点出土した。

表土出土の遺物

重機による耕作土剝離の際に出土したもの、遺構検出の段階で出土したものを、ここでは一括して扱う。

これらはいずれも小破片で、図示できたものは２点しかない（第18図）。　１の土師器坏の底部

に刻まれた線刻は、ＳＩ58住居跡から出土した坏(第７図６)にみられるものと酷似している。



No.	種別	器種	出土遺構	層位	法量 器高	口径	底径	外面 口縁部	体部	底部	内面 口縁部	体部	底部	登録No.
1	土師器	坏		表土						ケズリ 沈線			ミガキ 黒色	C－28
2				〃					縄文 沈線文			ナデ		B－1

第18図　第１次調査区表土出土遺物

種別	土師器																							
器種	杯	〃	〃	〃	〃	甕	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	不明	〃	〃
部位	口縁部	体部	〃	〃	底部	口縁部	〃	頸部	頸~体部	体部	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	体部	底部	不明
器面調整 外面—内面	ミガキ・ケズリ—ミガキ(黒色)	ケズリ—ミガキ(黒色)	ミガキ(黒色)—ミガキ(黒色)	ミガキ—ミガキ	ケズリ—ミガキ(黒色)	ヨコナデ—ヨコナデ	ヨコナデ・ハケメ—	ヨコナデ—ヨコナデ	ヨコナデ・ケズリ—ヘラナデ	ミガキ—ハケメ	ケズリ—ヘラナデ	ケズリ—ナデ	ケズリ—ハケメ	ケズリ—不明	ハケメ—ハケメ	ハケメ・ケズリ—ハケメ	ハケメ—不明	ナデ—ハケメ	不明—ヘラナデ	不明—ハケメ	不明—不明	ケズリ—ミガキ(黒色)	不明—不明	不明—不明
計(点)	2	10	1	1	2	15	1	4	2	2	18	10	24	4	16	1	3	2	2	11	33	3	2	2

種別	須恵器										
器種	杯	〃	〃	〃		〃	〃	甕	〃	〃	〃
部位	口縁部	体部	底部	〃	高台部	〃	〃	口縁部	体部	〃	〃
器面調整 外面—内面	ロクロナデ—ロクロナデ	ロクロナデ—ロクロナデ	ロクロナデ・切り離し不明→手持ケズリ—ロクロナデ	ロクロナデ・回転ヘラ切り→ナデ—ロクロナデ	ロクロナデ・切り離し不明→回転ケズリ—ロクロナデ	ロクロナデ・回転ヘラ切り→回転ケズリ—ロクロナデ	回転ヘラ切り—ロクロナデ	ロクロナデ—ロクロナデ	ロクロナデ—ロクロナデ	ロクロナデ—同心円文アテメ	ナデ—ナデ
計(点)	11	2	4	2	4	1	1	1	2	6	2

種別	須恵器						縄文or弥生土器	弥生土器	平瓦	総計(点)
器種		〃	〃	〃	〃	〃	不明	〃	〃	
部位		〃	〃	〃	〃	〃	体部	〃	〃	
器面調整 外面—内面	ナデ—ロクロナデ	平行タタキメ—ナデ	平行タタキメ—同心円文アテメ	平行タタキメ・ケズリ—ケズリ	不明—ロクロナデ	不明—ナデ	O段多条—ナデ	地文不明・沈線文—ナデ	縄叩き目—布目	
計(点)	1	1	6	1	1	1	2	1	1	222

第８表　表土出土遺物破片集計表（第１次調査区）

第 2 次 調 査

所　在　地　　城生野唐崎50－2
面　　積　　１５０㎡
期　　間　　昭和６２年７月１４日～７月１８日

第２次調査は農協支所の移転に伴う緊急調査である。調査は工期との関係から、一部第１次調査と調査期間が重った。表土除去作業には、重機を用いている。

発見された遺構には、竪穴住居跡５棟（ＳＩ68～72)、土壙１基（SK73）、その他がある。調査の方法は、農協側との協議の結果、新築される建物の基礎部分には、地下遺構に損傷を与えることのないように土盛りをすることがとり決められた。そこで、保存の良い１棟（ＳＩ68）のみを精査し、その他は土盛というかたちで保存することにした。

ＳＩ68住居跡

〔確認面〕　地山面で確認した。

〔重　複〕　この調査区の中央には、ＳＩ68・ＳＩ69・ＳＩ70の３棟の住居跡が東西に連なって重複している。本住居跡はこのなかで最も新しい。

〔平面形・規模〕　方形を呈する。南北2.7m、東西3.1m。

〔堆積土〕　堆積土は２層に大別された。第１層は、施設以外の竪穴内全体に堆積した暗褐色の粘土質シルトである。下へ行くほど地山ブロックの混じる量が多くなり、色調は次第に明さを増す。第２層は、カマド内の堆積土である。

第１層の堆積状況から、本住居跡は人為的に埋めもどされたとも考えられるが、確証はない。

〔壁〕　比較的ゆるやかな角度で立ち上がるが、しっかりとしている。

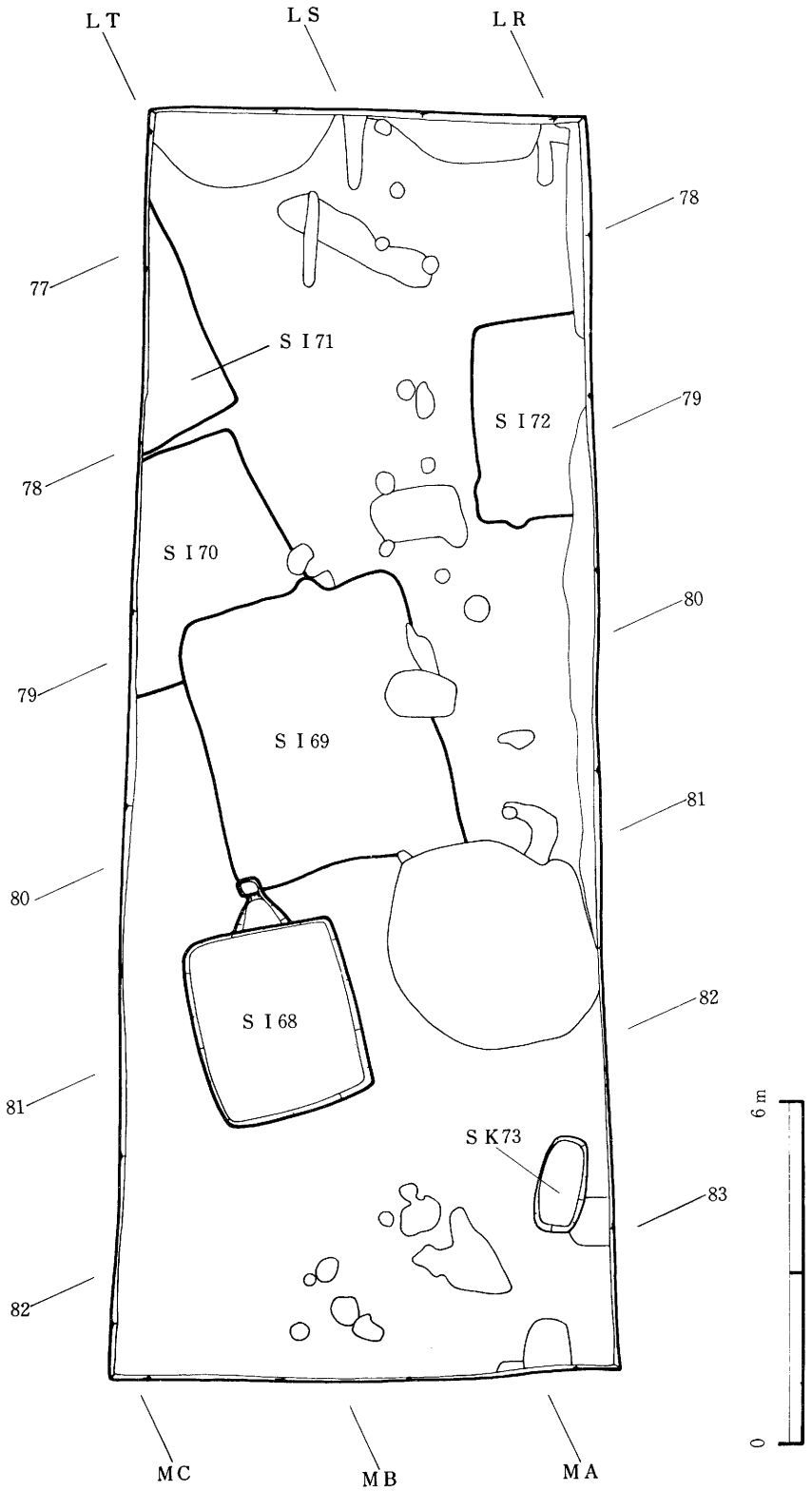
〔床　面〕　平坦で凹凸がなく、全面が貼床されている。貼床の厚さは７㎝～10㎝ある。床面はしまっている。

〔柱　穴〕　認められない。

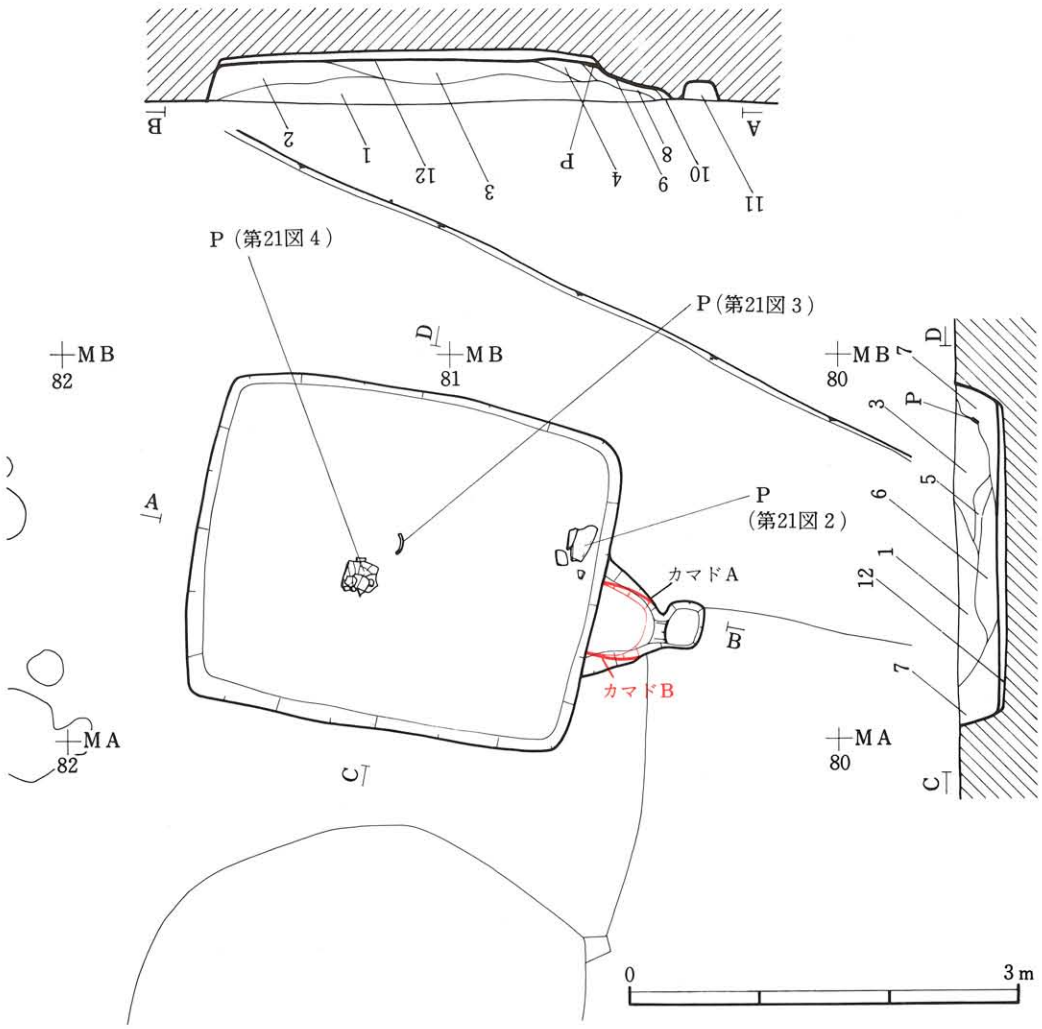
〔カマド〕　東壁中央部に２時期のカマドが検出された。したがって、ここでは古いものをカマドA、新しいものをカマドBとして説明する。

カマドA：煙道部がきわめて短かいカマドである。煙道部と燃焼部の境界は、５㎝～８㎝前後の段で区画されているが、これは住居壁の延長線上に一致している。なお、燃焼部の側壁は検出されなかった。

検出された煙道部は、住居壁と接する部分では95㎝と幅広い。しかし、外側へ行くにしたがって除々に狭くなり、またこれにしたがって底面も浅くなって行く。そして、55㎝外側へ張り出し



第19図　第２次調査区遺構配置図



層位	層No.	土色	土質	備考
第１層	1	暗褐色（註記もれ）	粘土質シルト	黄褐色シルトを霜降り状に含む。
	2	〃	〃	〃 をブロック状に含む。
	3	〃	〃	〃 をブロック状に含む。
	4	黒褐色（註記もれ）	〃	〃 を霜降り状に含む。炭化物を含む。
	5	暗褐色（註記もれ）	〃	〃 を霜降り状に含む。炭化物を含む。４よりブロックが細かい。
	6	〃	〃	〃 をブロック状に含む。
	7	〃	〃	〃 をブロック状に含む。
第２層	8	黄褐色（註記もれ）	〃	しまりあり。白色シルトをブロック状に含む。カマドの天井部崩落土とみられる。
	9	赤褐色（註記もれ）	シルト	焼土。
	10	暗褐色（註記もれ）	〃	
	11	〃	粘土質シルト	
第３層	12	黄褐色（註記もれ）	〃	貼床。住居跡全面にわたって認められる。

黄褐色シルトを含む割合が次第に高くなる。

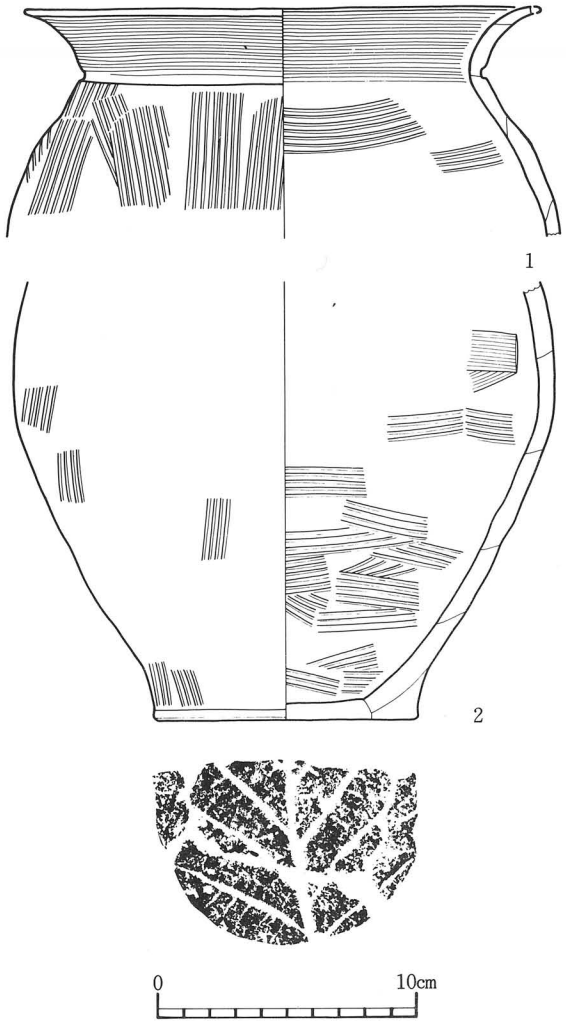
第20図　ＳＩ68住居跡

たところで先端部に掘られた煙出しのピットにつながる。煙出しは、径30㎝～40㎝のゆがんだ円形をなす。確認面からの深さは15㎝あり、底面は平担である。

カマドB：カマドAの煙道部内壁に、黒褐色の粘土を貼って、あらたにこれを再構築したものである。粘土は主に住居壁と接する部分を中心に貼り足されており、その結果、この部分での幅は、95㎝から50㎝に縮少されている。このため煙道部は当初のもの(A)に較べ、幾分スマートな形となっている。その他の部分は、カマドAで構築されたものがそのまま再利用されている。

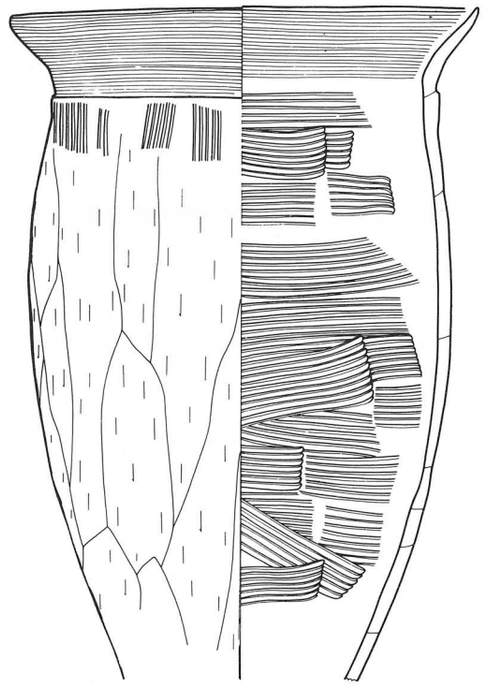
〔周溝〕　認められない。

〔出土遺物〕　床面から完形品に近い土師器甕が4点出土している(第22図)。このなかには、ロクロを使用したものが1点（3）あり、ロクロ不使用のもの（1・2・4）と共伴している。

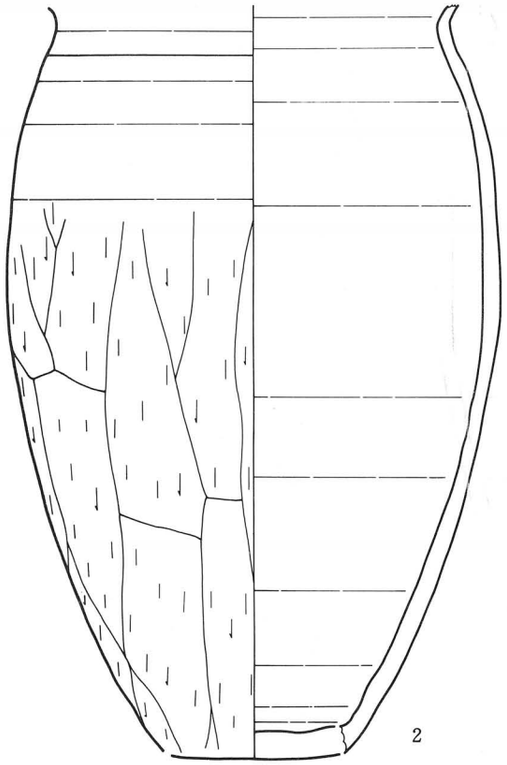


No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量			外面			内面			登録No.
					器高	口径	底径	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	
1	土師器	甕	SI68	2		(20.0)		ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ	ハケメ		C－32
2	〃	〃	〃	1			10.3		〃	木葉痕		ハケメ ヘラナデ	ハケメ	C－33

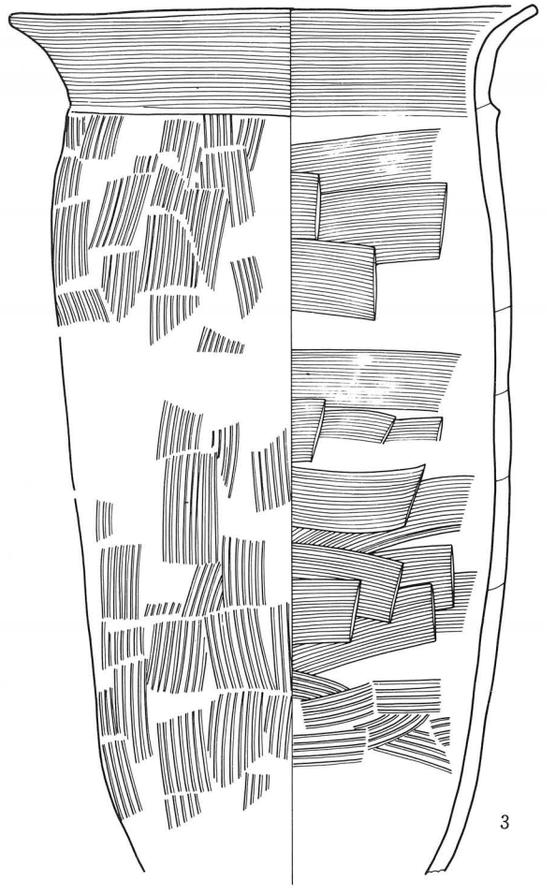
第21図　SI68住居跡出土遺物(1)



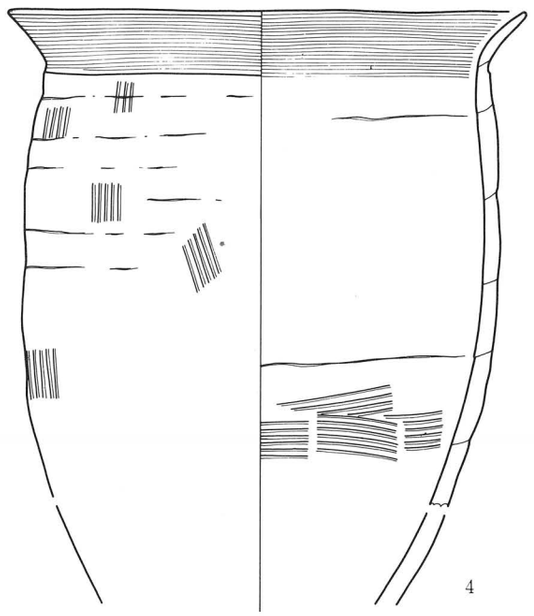
1



2



3



4

0 10cm

No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No.
1	土師器	甕	SI68	床面		19.4		ヨコナデ	ケズリ		ヨコナデ	ハケメ		C－29
2	〃	〃	〃	〃			(7.5)		ロクロナデ ケズリ			ロクロナデ		D－4
3	〃	〃	〃	〃		21.9		ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ	ヘラナデ ハケメ		C－30
4	〃	〃	〃	〃		21.5		ヨコナデ	ハケメ			ナデ ハケメ		C－31

第22図　SI68住居跡出土遺物(2)

第９表　ＳＩ68住居跡出土遺物破片集計表

種別	器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	堆積土 1	2	3	4	5	6	7上	8	9	10	11	床上	12	計 (点)
土師器	甕	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	2											1		3
〃	〃	〃	不明	不明								2						2
〃	〃	頸部	ヨコナデ	ヨコナデ	7													7
〃	〃	〃	不明	ヨコナデ												1		1
〃	〃	体部	ケズリ	ヘラナデ	2													2
〃	〃	〃	ケズリ	不明	2													2
〃	〃	〃	ハケメ	ヘラナデ	14							4						18
〃	〃	〃	ハケメ	ハケメ	5													5
〃	〃	〃	ハケメ	不明	9													9
〃	〃	〃	不明	ヘラナデ	10													10
〃	〃	〃	不明	不明								5				8		13
〃	〃	底部	ハケメ	ヘラナデ								1				1		2
〃	〃	〃	木葉痕	ハケメ	2											3		5
〃	〃	〃	不明	不明												1		1
〃	不明	不明	不明	不明							1							1
計 (点)					53						1	12				15		81
須恵器	坏	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	1											1		2
〃	甕	体部	平行タタキメ	不明	1													1
〃	〃	〃	平行タタキメ	ヘラナデ								1						1
計 (点)					2							1				1		4
石器	スクレイパー（頁岩）										1							1
計 (点)											1							1
総計 (点)																		86

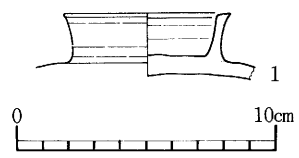
ＳＩ69～72住居跡

いずれも未精査である。平面形はいずれも方形を呈しているが、全体の規模の知れるものは、ＳＩ69１棟しかない。重複関係は、前述したＳＩ68とＳＩ69・ＳＩ70との間で、ＳＩ70→ＳＩ69→ＳＩ68の新旧関係が認められる。また、ＳＩ70とＳＩ71もきわめて近接しており、調査区外において重複関係のある可能性が高い。なお、平面規模については、第16表に一括して掲載しておいた。

出土遺物は遺構検出の段階において、SI69住居跡とSI71住居跡から、図示可能な土器が各１点づつ出土している（第23・24図）。

第10表　ＳＩ70住居跡出土土器破片集計表

種別	器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	堆積土	計 (点)
土師器	甕	体部	ナデ	ヘラナデ	1	1
〃	〃	〃	不明	ヘラナデ	1	1
計 (点)					2	2

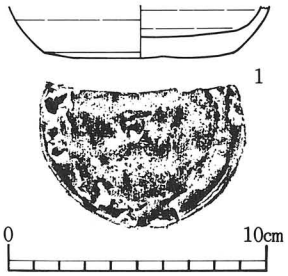


No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No.
1	須恵器	蓋	ＳＩ71	確認面					ロクロナデ			ロクロナデ		Ｅ－16

第23図　ＳＩ71住居跡出土土器

第11表　ＳＫ73出土遺物破片集計表

種別	器種	部位	器面調整 外面－内面	堆積土 1	計 (点)
土師器	坏	体部	ロクロナデ－ロクロナデ	1	1
			不明－ミガキ(黒色)	1	1
須恵器	甕		ロクロナデ－ロクロナデ	1	1
			不明－不明	3	3
計 (点)				6	6



No.	種別	器種	出土遺構	層位	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No.
1	須恵器	坏	ＳＩ69	確認面			7.5		ロクロナデ	回転ヘラ切り		ロクロナデ	ロクロナデ	Ｅ－15

第24図　ＳＩ69住居跡出土遺物

第12表　ＳＩ69住居跡出土遺物破片集計表

種別	器種	部位	器面調整 外面－内面	堆積土 1	計 (点)
土師器	坏	体部	不明－ミガキ	2	2
〃	〃	〃	不明－ミガキ(黒色)	1	1
〃	甕	口縁部	ヨコナデ－ヨコナデ	3	3
〃	〃	体部	ケズリ－ヘラナデ	2	2
〃	〃	〃	ケズリ－不明	1	1
〃	〃	〃	ハケメ－ハケメ	2	2
〃	〃	〃	ハケメ－不明	1	1
〃	〃	〃	不明－ヘラナデ	1	1
〃	〃	〃	不明－ハケメ	2	2
〃	〃	〃	不明－不明	8	8
〃	〃	〃	計 (点)	23	23
須恵器	坏	体部	ロクロナデ－ロクロナデ	1	1
〃	甕	〃	ナデ－ロクロナデ	1	1
計 (点)				2	2
総計 (点)					25

第13表　ＳＩ71住居跡出土遺物破片集計表

種別	器種	部位	器面調整 外面－内面	堆積土 1	計 (点)
土師器	甕	体部	ケズリ－ヘラナデ	2	2
〃	〃	〃	ハケメ－ハケメ	3	3
〃	〃	〃	ハケメ－不明	2	2
〃	〃	〃	不明－不明	2	2
計 (点)				9	9
須恵器	坏	ロ～体部	ロクロナデ－ロクロナデ	1	1
〃	〃	底部	回転ヘラ切り－ロクロナデ	1	1
〃	甕	体部	ロクロナデ－ロクロナデ	1	1
〃	〃	〃	平行タタキメ－同心円文アテメ	1	1
〃	〃	〃	平行タタキメ－ナデ	1	1
〃	〃	〃	不明－不明	1	1
計 (点)				6	6
総計 (点)					15

ＳＫ73土壙

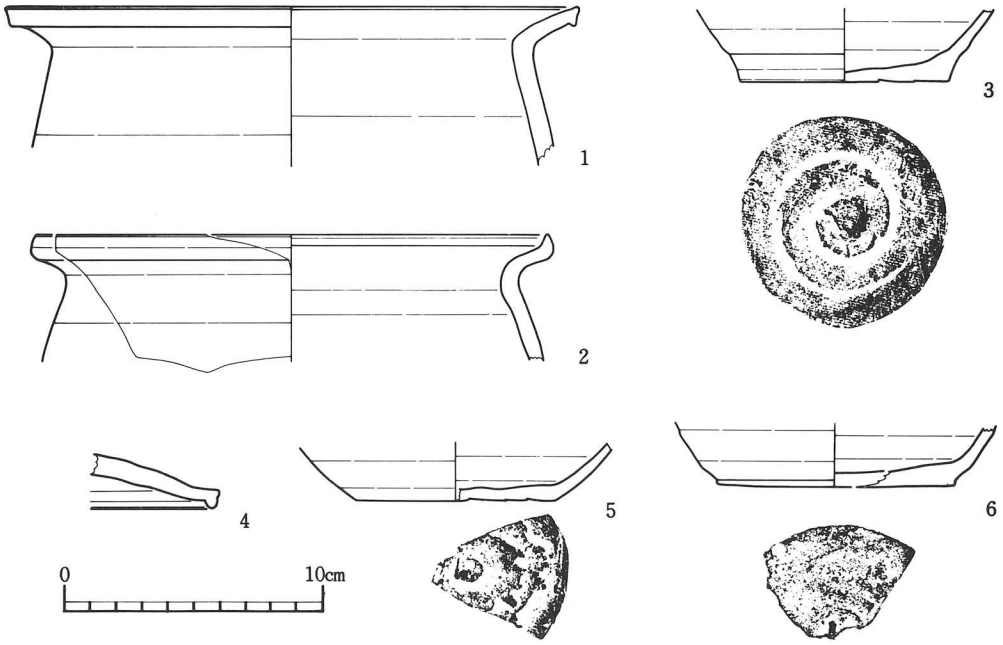
1.6ｍ×0.8ｍの長方形を呈する土壙である。確認面からの深さは約10㎝しかなく、浅い。黒褐色を呈する堆積土中からは、土師器と須恵器の破片がわずかに出土した。

表土出土の遺物

表土剝離ならびに遺構検出の段階において、土師器・須恵器・手づくね土器が若干出土した（第25図・第14表）。

第14表　表土出土遺物破片集計表(第2次調査区)

種別	器種	部位	器面調整 外面－内面	計 (点)
土師器	甕	体部	不明－不明	1
須恵器	〃	体部	平行タタキメ－同心円文アテメ	2
手づくね		ロ～体部	オサエ－オサエ	1
計 (点)				4



No.	種別	器種	出土遺構	層位	法量			外面			内面			登録No.
					器高	口径	底径	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	
1	土師器	甕		表土		(22.0)		ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ		D－5
2	〃	〃		〃		(20.0)		〃	〃		〃	〃		D－6
3	須恵器	〃		〃			8.0		〃	回転ヘラ切り		〃	ロクロナデ	E－17
4	〃	蓋		〃				ロクロナデ	〃		ロクロナデ	〃		E－18
5	〃	杯		〃			(7.6)		〃	回転ヘラ切り		〃	ロクロナデ	E－19
6	〃	甕		〃			(9.2)		〃	回転ヘラ切りナデ		〃	〃	E－20

第25図　第２次調査区表土出土遺物

第３次調査

所在地　城生野唐崎４６－５

面　積　２㎡

期　間　昭和６２年８月５日

第３次調査は、二階堂康允氏宅の便槽取り付け工事に伴う緊急調査である。この調査区は、第１次調査区の西に隣接している。便槽は同氏宅の敷地内に２ケ所設置された。発見遺溝・遺物はない。

第 4 次 調 査

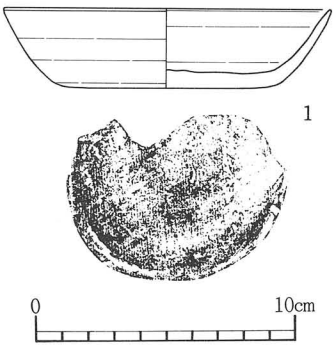
所在地　城生野唐崎・大堀

面　積　1250㎡

期　間　昭和６２年９月１日～９月１４日

第４次調査は、水道管埋設工事に伴う緊急調査である。工事は、富野公民館から富野小学校へ通じる道路（総延長250ｍ）中央に埋設溝を掘り、ここに水道管を埋設するというものであった。調査はこの埋設溝断面から、遺構を確認した。

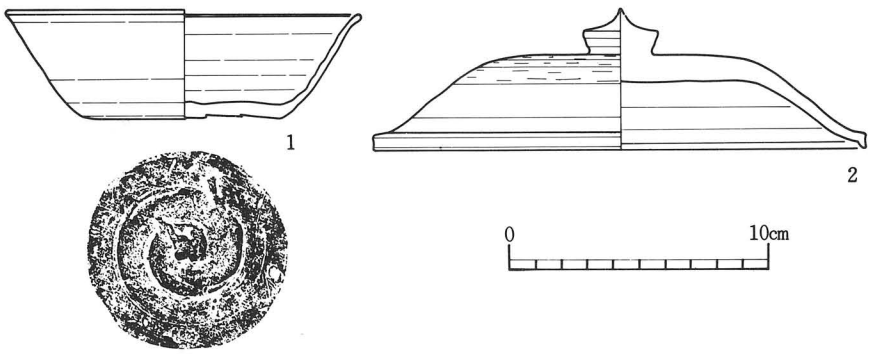
発見された遺構には、竪穴住居跡８棟（ＳＩ74～81）、その他がある。住居跡の分布は調査区内の全域にわたっている（第29図）。



No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量			外面			内面			登録No.
					器高	口径	底径	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	
1	須恵器	坏	ＳＩ76	1	3.1	12.2	8.1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り 手持ケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	Ｅ－23

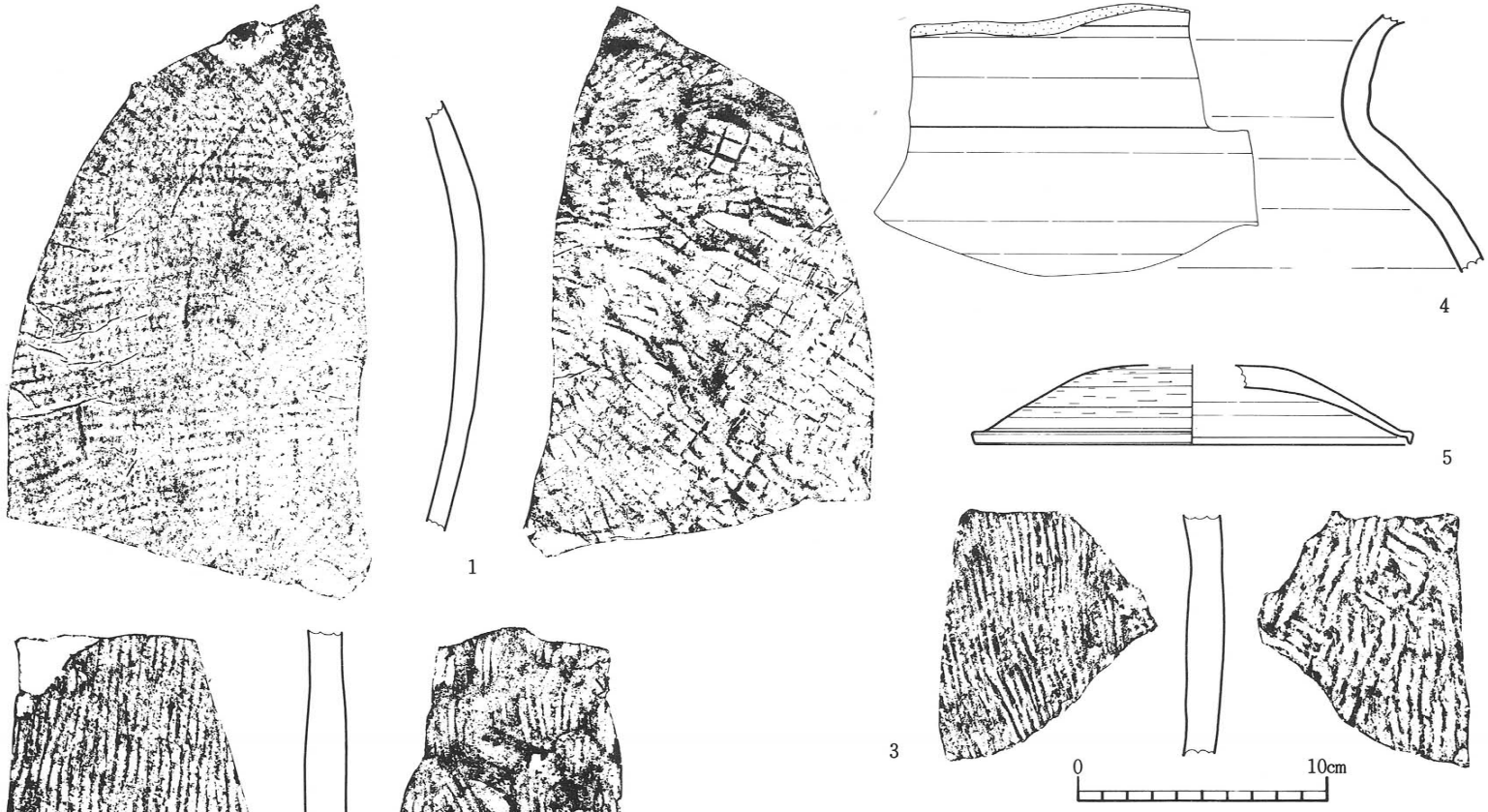
第26図　ＳＩ76住居跡出土遺物

遺物は、ＳＩ75とＳＩ76の断面から図示可能な土器が出土した（第26・27図）。



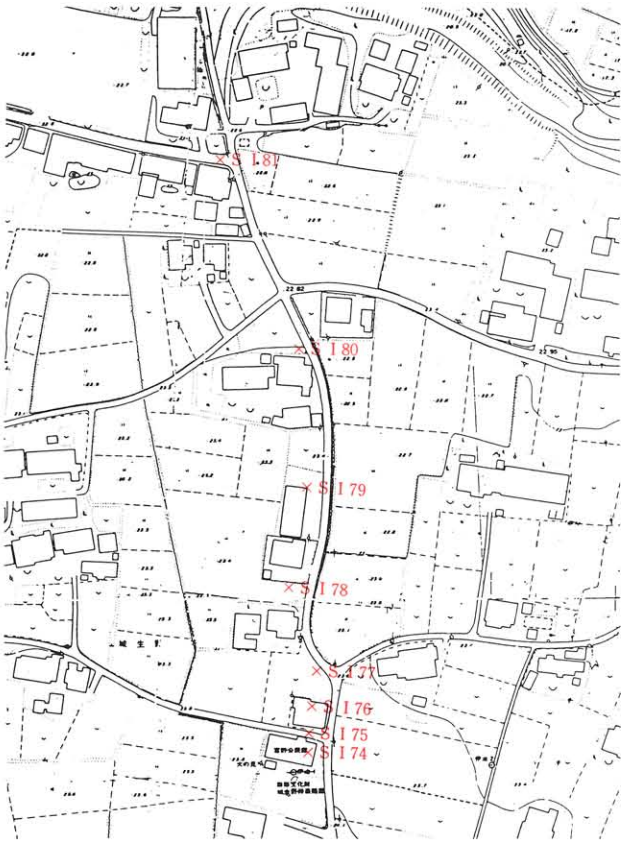
No.	種別	器種	出土遺構	層No.	法量			外面			内面			登録No.
					器高	口径	底径	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	
1	須恵器	杯	ＳＩ75	1	4.1	13.7	7.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	Ｅ－21
2	〃	蓋	〃	〃	(5.5)	19.0		〃	ロクロナデ 回転ケズリ		〃	〃		Ｅ－22

第27図　ＳＩ75住居跡出土遺物



No.	種別	器種	出土遺構	層位	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No.
1	須恵器	甕		表土					格子叩き目			格子叩き目 同心円文アテメ		E－24
2	〃	〃		〃					平行叩き目			平行叩き目		E－25
3	〃	〃		〃					〃			〃		E－26
4	〃	〃		〃					ロクロナデ			ロクロナデ		E－27
5	〃	蓋		〃		(17.8)		ロクロナデ	ロクロナデ 回転ケズリ		ロクロナデ	〃		E－28

第28図　第４次調査表土出土遺物



第29図　第４次調査区発見住居跡分布図

第　5　次　調　査

所在地　城生野唐崎

面　積　1080㎡

期　間　昭和６３年１月１８日～２月９日

第５次調査は、農道儀平線の整備に伴う遺構確認調査である。この儀平線は総延長が 216 m、幅が3.5 mで、富野公民館から国道４号線へ通じている。整備事業は、これを５mに拡幅し、アスファルト舗装にするというものであった。調査はこれに伴い、その路線敷について遺構確認調査を実施した。

発見された遺構には、竪穴住居跡７棟（ＳＩ82～88)、土壙２基（SK89・90）、多数の溝、その他がある。このうち精査は、ＳＩ86・ＳＫ89・ＳＫ90で実施した。

出土遺物には、須恵器、土師器などがあり、SK90からは骨片も出土した。

ところで、この調査は当初62年秋に実施する予定であったが、工期の遅れの関係で、その開始時期が翌63年にずれ込んでしまった。このためまだ未整理の資料が多く、その全容を公表できる段階にない。したがって、成果の詳細については次年度の報告のなかで記すことにしたい。ただし、住居跡の概要は第16表にまとめておくことにする。

第 6 次 調 査

所在地　城生野大堀５５

面　積　８０㎡

期　間　昭和６３年２月２５日

第６次調査は、高橋一次氏宅の畜舎建築に伴う緊急調査である。この場所は、台地全体の地形からみて外郭の存在が予想されたが、発見遺構・遺物はなかった。

考　　察

遺構の年代について

本年度の調査で検出された遺構には、竪穴住居跡、土壙、井戸、溝、その他がある。ここでは、直接伊治城に関連すると思われる住居跡（22棟）のうち、精査を行った4棟（ＳＩ58・ＳＩ60・ＳＩ61・ＳＩ68）を対象に、主に出土土器の検討から、その所属年代を考えてみたい。

〔SI 58住居跡〕 第1次調査区において検出された。後述するＳＩ60に破壊されており、火災により廃絶している。

年代決定資料となる土器は、23点ある（第7・8図）。これらは、床面、周溝内堆積土上面、カマド内堆積土から出土した。このうちカマド内から出土した土器は、17点あり、出土傾向には明らかな偏りが認められる。数量的には、土師器が圧到的に多い。

このうち土師器坏は5点ある。これらは、外面に段のあるもの（第7図4・5）と段のないもの（第7図6・7・8）とがあり、また、技法的には、内面ミガキ＋黒色処理、外面ミガキが主体的に用いられている（実測図には示さなかったが、6と8の外面には、わずかながらミガキの痕跡が観察される）。

こういった特徴を備えた土器は、陸奥国分寺跡僧房西建物基壇南側の溝より出土した土師器杯に類例が求められる（氏家：1961.3、小井川・高橋：1977.3）。この溝は、陸奥国分寺の創建（741～767）に伴うとみられ、氏家和典氏は、この土器を基準資料として国分寺下層式を設定した（氏家：1967.3）。そして、その年代については、下限にややあいまいさを残したものの、上限については「天平十三年（741）を遡ることは絶対にあり得ない」（氏家：1976.3）と明確に規定した。該土器は、その後の資料の蓄積に伴い、大きく8世紀後半の年代が与えられている（桑原：1976.3、小井川・小川：1982.3他）。

したがって、本住居跡の年代についても、ほぼこの頃の年代を与えて差しつかえないと思われる。

〔SI 60住居跡〕 第1次調査区で検出された。この住居跡は、前述したＳＩ60を切って構築されている。

年代決定資料には、床面・カマド底面から出土した3点、それにカマド側壁の補強に用いられた1点の計4点がある（第12図）。

このうち、床面上から出土した椀状の土師器坏（3）は、迫町対島遺跡第4号住居跡（加藤・

伊藤：1955.３）に類列を求めることができる。この住居跡から出土した土器は、一時、国分寺下層式に後続する「対島式」の基準資料とされた（氏家：1961.３）。その特徴としては；土師器坏の完全な平底化、内・外面に巡る段ならびに沈線の消失などがあげられる。該土器は、その後、製作技法の再吟味が重ねられ（阿部：1968.３、桑原：1976.３、小井川・高橋：1977.3）、現在では、国分寺下層式のなかに包括されて考えられるにいたっている。しかし、土師器の器形的な変遷からみた場合、この一群の土器が同形式の最終段階に位置づけられることは、明らかであろう　（小井川・小川：1982.３）。

一方、カマド補強材として用いられた土師器甕は、製作に際しロクロが使用されている。

以上の点からみて、この住居跡出土の土器には、国分寺下層式の最終段階と次型式である表杉ノ入式相方の要素を認めることができる。したがって住居跡の年代には、８世紀末～９世紀初頭を考えておきたい。

〔**ＳＩ 61 住居跡**〕　第１次調査区において検出された。他の住居跡との重複関係はみられない。

年代決定資料は、床面上から出土した土師器甕（第15図）１点のみである。

この甕は体部と口縁部に明瞭な境をもたず、口縁部はわずかに外反している。器面調整は、外面が口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ、 内面が口縁部ヨコナデ、体部ナデである。類例は、調整に若干の差異があるものの、瀬峰町大境山遺跡出土の第４群土器（阿部・赤沢：1984.３）にみることができる。この土器群には、８世紀後半を中心とした時期の年代が与えられている。

また、直接の年代決定資料とはならないが、堆積土中からも出土した土師器坏（４）と須恵器坏（１）も、同時期の特徴を備えている。

資料的に弱い面は否めないが、こうしたことより、本住居跡の年代には、一応８世紀後半を中心とした時期を考えておきたい。

〔**ＳＩ 68 住居跡**〕　第２次調査区において検出された。ＳＩ69・ＳＩ70と重複しており、前二者より新しい。

年代決定資料には、大形の土師器甕４点がある（第21図）。これらは、ロクロ不使用のもの（１・２・４）と、ロクロ使用のもの（３）とがあり、両者は床面上で共伴している。

このうちロクロ不使用の３点に共通する口縁部下端の段は、国分寺下層式の甕にみられる特徴といえる。また、３のロクロ技術は、表杉ノ入式の特徴である。

土師器坏を欠くため、明確ではないが、このように本住居跡出土の土器にも、前述のＳＩ61と同様、国分寺下層式と表杉ノ入式の要素を認めることができる。したがって、住居跡の年代には、８世紀末～９世紀初頭を考えておきたい。

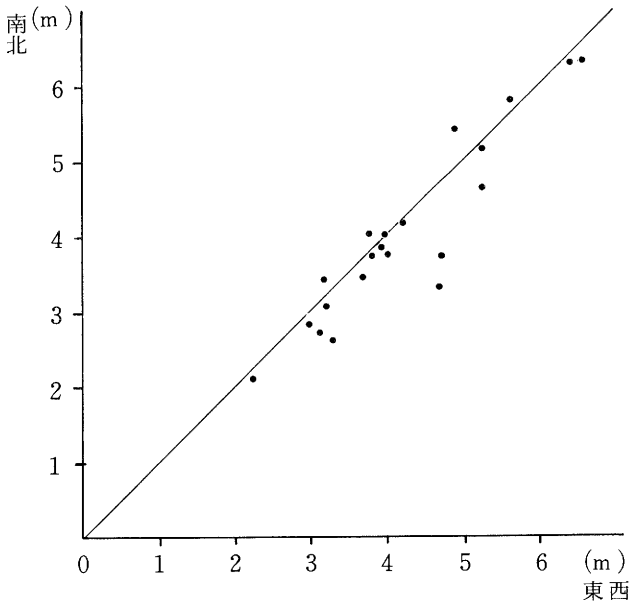
以上のように、4棟の住居跡には、国分寺下層式から表杉ノ入式初期の年代が与えられた。この年代観は、過去3ケ年の調査成果（宮多研：1978～1980.3）と一致しており[註1)]、また、これは文献上にみられる伊治城の存在した期間とも一致している。

なお、精査を行わなかった住居跡も、遺構確認段階で出土した遺物からみて、その所属年代はほぼこの頃におさまる可能性が高い。

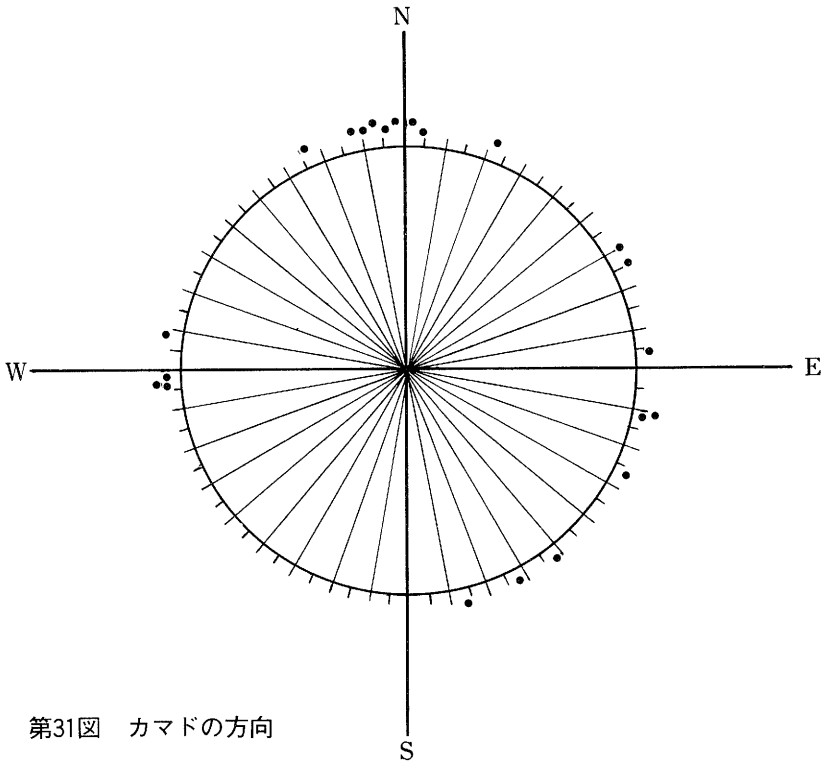
本遺跡発見の住居跡について

本遺跡からは、本年度の調査成果を合わせ、計46棟の竪穴住居跡が発見された。これらは、城生野地区の台地全域にわたって分布しているとみられ、今後の調査によって、その数はさらに増大するとみられる。政庁跡が未発見の現在、この遺構の城内での具体的な役割・存続期間についてはまだ明確にし得ないが、ここではひとまずこれらを集成し、今後の備えとしておきたい。

〔平面規模について〕　本遺跡発見の住居跡の平面規模については、既に、一辺6m前後の大形のものと、一辺4m前後の小形のものとに大別されるという指摘がなされている（宮多研：1979.3）。そこで、今回検出されたものも含め、平面規模の知れる21棟について集計してみた（第30図）。これをみると、本遺跡の住居跡は、一辺2m前後のものから、一辺6．5m前後のものまであることがわかる。しかし、これらはとくにある特定の大きさに偏るといったような傾向性は認められない。むしろ、多様な大きさのものがバラツいているとみることができよう。ただし、これが伊治城の存続した全期間を通じての傾向なのか、それとも同時存在した住居跡の間には、ある一定の規則性があったのかは、今後の課題である。



第30図　住居跡平面規模



第31図　カマドの方向

〔**カマドについて**〕　カマドの構造は、住居外へ張り出す細長い煙道部と、粘土積み上げ側壁による燃焼部からなる。ただし、まれにはＳＩ68のように、煙道部がきわめて短かい住居跡も存在する。燃焼部の支脚や側壁の補強には、土師器甕を用いることが多い。方向には、とくに規則性は認められない（第31図）。

〔**柱穴・周溝**〕　柱穴・周溝の有無と住居床面積との間には、きわめて明瞭な相関関係が認められる。第32図に示したように、床面積にして５㎡～10㎡までの小形の住居跡には両者がないが、これよりやや大形の10㎡～15㎡の住居跡になると周溝のみが認められるようになる。そして、20㎡以上の住居跡になると、柱穴・周溝の両者がそろう。このうち、柱穴の有無については、上部構造に関係すると思われる。

今後資料の蓄積をはかって検討して行きたい。

×両者なし　△周溝のみ　○両者あり

床面積㎡	0 ～ 5	5 ～ 10	10 ～ 15	20 ～ 25	25 ～ 30	30 ～ 35	35 ～ 40	40 ～ 45
柱穴・周溝	×	××	△△△	○	○○	○		○○

第32図　柱穴・周溝の有無と床面積

なお、こういった傾向は、多賀城跡においても報告されている（宮多研：1976.3）。

［床面に据えられた須恵器大甕について］ 4棟で検出された。（ＳＩ04・12・13・31）。これは壁近くの床面上に大甕を据え、さらにこれを粘土でかためて補強したものである。

註１）

白鳥良一氏は、本遺跡出土の土器をもとに「伊治城型組成の土器群」を提唱している（宮多研：1979.3他）。これは、S104住居跡床面出土のセットを基準資料とするもので、ロクロ使用・不使用の土師器坏・甕が共存することをその特徴としている。

白鳥氏は、この土器群について「一定の年代における土器使用のあり方を反映している」として土器の一類型とみなし、８世紀末頃の年代を与えた。しかし、これについては、その後、森貢喜、小井川和夫、小川淳一、阿部正光の各氏によってそれぞれ疑問が表明されている。これを要約すれば、ロクロ土師器の出現には、多分に政治的な背景が関与していると考えられるから、遺跡の性格やそのおかれた地域の差によって、その導入の時期や内容には微妙な違いがあるのではないかというものである。

この現象は、本年度の調査でも確かに認められ（S161・S168）、その年代観については大筋では変更がないと思われる。しかし、これを土器の一類型とみなす評価については、さらに詳細な吟味が必要であろう。これは単に土器の問題にとどまらず、遺跡の評価、さらにはこの地域における当時の社会状況の評価にもつながると思われるので、今後、慎重に検討して行くことにしたい。

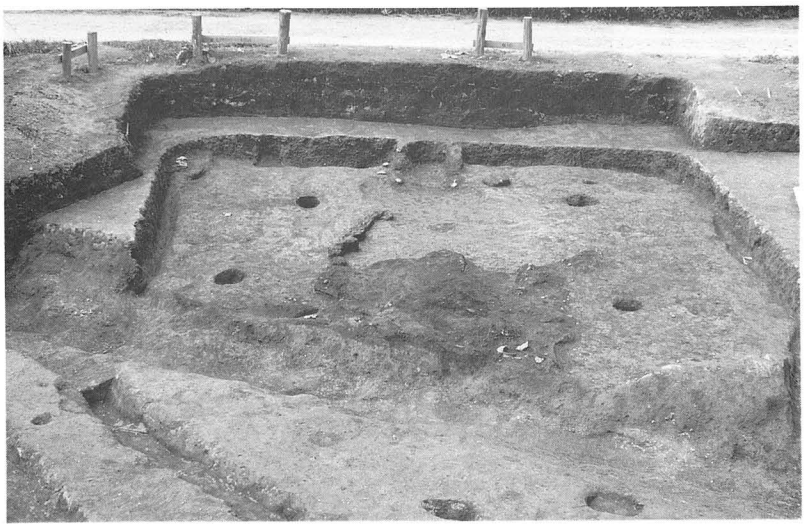
参考・引用文献

加藤・伊藤（1955．3）「宮城県登米郡新田村字対島竪穴住居址群」『登米郡新田村史』
氏家　和典（1957．3）「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会
氏家　和典（1961．3）「土器」『陸奥国分寺跡発堀調査報告書』　宮城県教育委員会
高橋　富雄（1962.10）「古代辺境村落試論」『東北大学教養部文科紀要』第十集
氏家　和典（1967．3）陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』
阿部　義平（1968.10）「東国の土師器と須恵器ー多賀城外の出土土器をめぐってー」『帝塚山考古』№１
桑原　滋郎（1969.12）「ロクロ土師器坏について」『歴史』第30輯　東北史学会
岡田・桑原（1974．3）「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要』Ⅰ　宮城県多賀城跡調査研究所
工藤・桑原（1974．3）「東北地方における古代土器生産の展開」『考古学雑誌』第57巻第３号　日本考古学会
桑原　滋郎（1976．3）「東北地方北部および北海道の所謂第Ⅰ型式の土器について」『考古学雑誌』第61巻 第４号　日本考古学会
小井川・高橋（1977.12）「宮城県対島遺跡出土の土器」『宮城史学』第５号
宮城県多賀城跡調査研究所（1978～1980．３）『伊治城跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』　多賀城関連遺跡発堀調査報告書第３～第５冊
小井川・手塚（1978.3）「糖塚遺跡」『宮城県文化財発堀調査略報』　宮城県文化財報告書第53集　宮城県教育委員会
白鳥　良一（1980．3）「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ　宮城県多賀城跡調査研究所　宮城県教育委員会
森　　貢喜（1982．1）　『水入遺跡発堀調査報告書』　宮城県文化財調査報告書第84集　宮城県教育委員会
小井川・小川（1982．3）「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ』　宮城県文化財調査報告書第83集　宮城県教育委員会

第16表　住居跡一覧表

No.	登録	平面形	規模(m) 南北×東西	柱穴	周溝	貼床	カマド 位置	カマド 方向	カマド 煙道部(m)	調査状況	新旧関係	備考
1	SI 04	正方形	5.2 × 5.2	4	部分的に有	部分的に有	東辺南寄り	E−25°−N		精査		火災により焼失。
2	SI 12	〃	6.3 × 6.4	4	全周	全面	北辺中央	N−8°−W		〃		
3	SI 13	〃	5.8 × 5.6	4	ほぼ全周	ほぼ全面	北辺中央	N−11°−W	1.2	〃		
4	SI 14	〃	3.1 × 3.2	無	無	全面	南辺東寄り	S−27°−E	1.1	〃		
							東辺東寄り	E−28°−N	1.1	〃		カマドには2時期がある。（古）
5	SI 25	〃	3.4 × 3.2	無	全周	部分的に有	北辺東寄り	N−7°−W	1.4	〃		（新）
6	SI28−A	〃	2.1 × 2.2	無	無	無	東辺南寄り	N−1°−W		〃	SI28−Bより古い。	
7	SI28−B	〃	3.5 × 3.7	無	全周	部分的に有	〃	〃	1.8	〃	SI28−A・SI30より新しい。	SI28−Aを北西側へ拡張した住居跡。
8	SI 29	〃	4.2 × 4.2							未精査	SI30より新しい。	
9	SI 30		? × 3.9							〃	SI28−B・SI29より古い。	
10	SI31−A	長方形	4.6 × 5.2	4	全周	全面	北辺中央	W−3°−S		精査	SI31−Bより古い。	柱穴には建て替えの痕跡がある。
11	SI31−B	ほぼ正方形	6.3 × 6.5	4	全周	全面	北辺中央	W−3°−S		〃	SI31−A・SI32より新しい。	SI31−Aを南側へ拡張した住居跡。
12	SI 32	正方形	4.0 × 3.8				東辺南寄り	N−23°−E		未精査		
13	SI 33	〃	4.0 × 4.0							〃		
14	SI 34		3.2 × ?							〃		
15	SI 35		4.4 × ?				北辺中央	N−2°−W		〃		
16	SI 36	正方形	3.8 × 4.0				南西隅	E−26°−S		〃		
17	SI 37	〃	3.9 × 3.9				東辺南寄り	N−1°−E		〃		
18	SI 38		? × 6.0							〃		
19	SI 40	ゆがんだ正方形	3.8 × 3.8	無	全周	無	北辺中央			精査		
20	SI 44		? × 6.5				東辺	E−4°−N	2.2	未精査		
21	SI 54			無	無		西辺	W−7°−N	1.8	精査		
22	SI 58	長方形	5.4 × 4.9	4	部分的に有	部分的に有	北辺中央	N−25°−W		〃	SI60より古い。	火災により焼失。
23	SI 59		3.3 × ?				西辺中央		1.8	未精査		
24	SI 60	長方形	2.8 × 3.0	無	無	部分的に有	東辺南寄り			精査	SI58より新しい。	
25	SI 61	〃	2.6 × 3.3	無	無	部分的に有	東辺中央?			〃		カマドは破壊されているが、推定場所には炭・焼土が集中する。
26	SI 62	〃	3.3 × 4.7		有	有				未精査		
27	SI 68	〃	2.7 × 3.1	無	無	全面	東辺中央	E−11°−S	0.85	精査	SI69より新しい。	カマドは同位置で補修されているが、煙道部の長さは変わらない。
28	SI 69	〃	3.7 × 4.7				東辺中央?	E−11°−S		未精査	SI68より古く、SI70より新しい。	
29	SI 70		? × 3.6							〃	SI68・SI69より新しい。	
30	SI 71									〃		
31	SI 72		? × 3.3							〃		
32	SI 74									断面確認		
33	SI 75				有	有				〃		
34	SI 76					〃				〃		
35	SI 77					〃				〃		
36	SI 78					〃				〃		水道管埋設溝断面において確認。
37	SI 79					〃				〃		
38	SI 80					〃				〃		
39	SI 81					〃				〃		
40	SI 82									未精査		
41	SI 83		? × 4.3							〃		
42	SI 84		? × 6.0							〃		
43	SI 85						南辺中央	S−38°−E		〃		
44	SI 86		? × 3.8	無	無	部分的に有	南辺中央	S−14°−E		精査		
45	SI 87		? × 4.3				西辺南寄り	W−1°−S	1.1	未精査		
46	SI 88									断面確認		

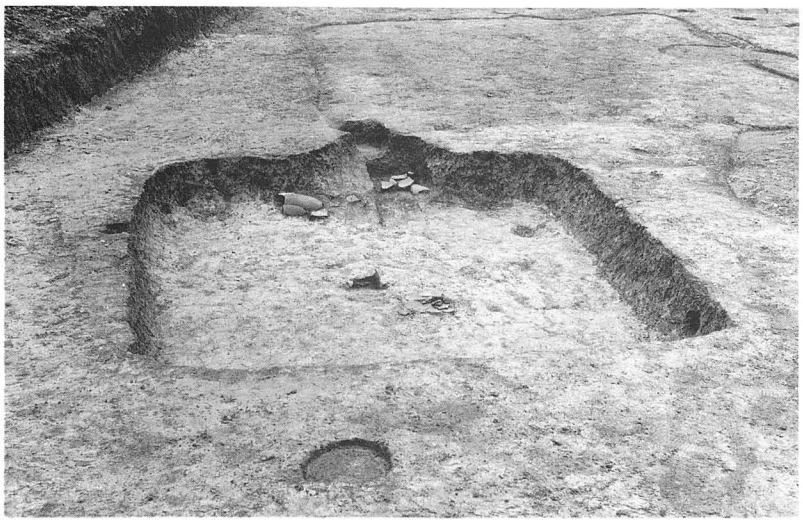
第１次調査区全景



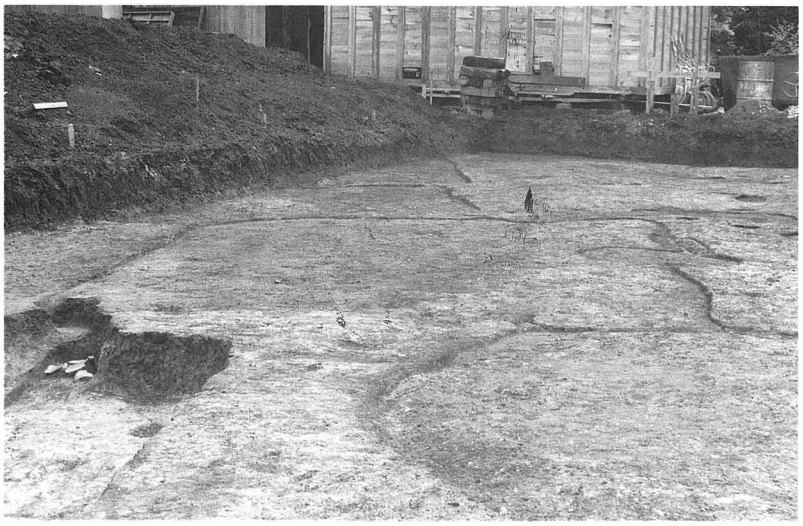
SI 58住居跡

カマド土器出土状況
(SI58)

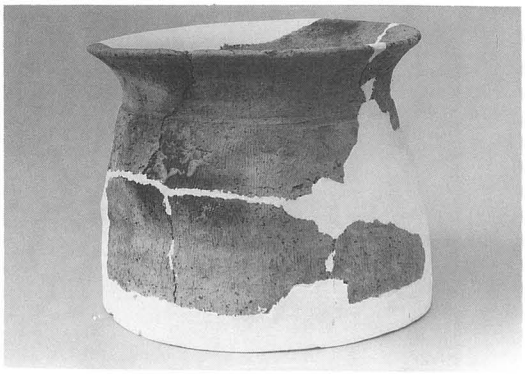
SI 60住居跡



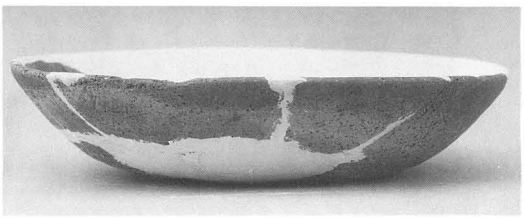
SI 68住居跡

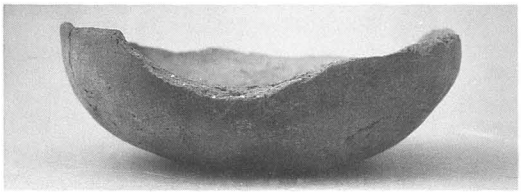


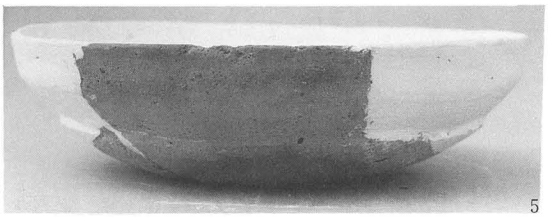
SI 69住居跡

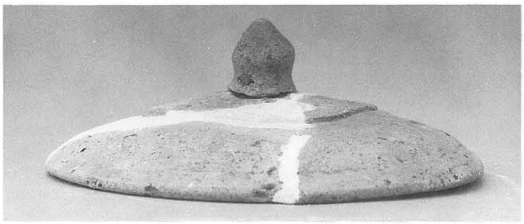

1

2

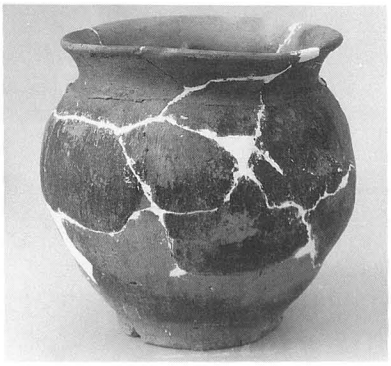

3


4


5


6

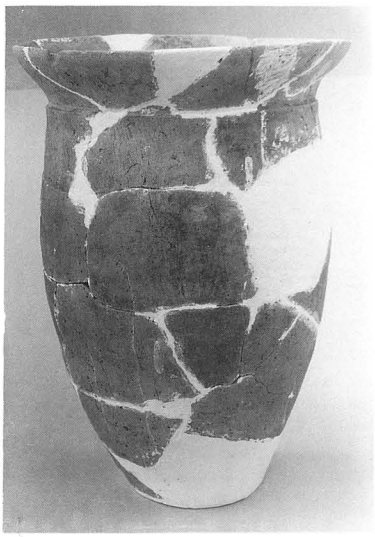
7

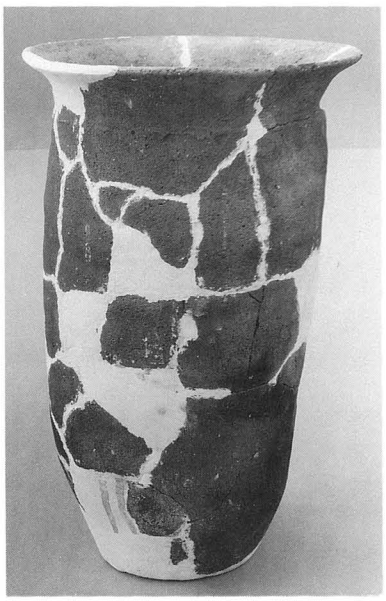

8

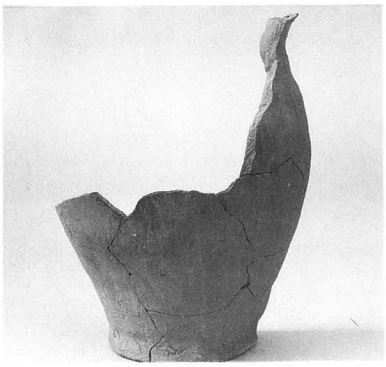
9

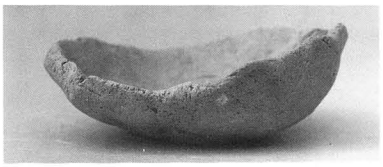
1	第	8	図	1	6	第	8	図	2
2	第	7	図	2	7	第	7	図	3
3	第	7	図	8	8	第	8	図	3
4	第	7	図	7	9	第	7	図	1
5	第	7	図	4					

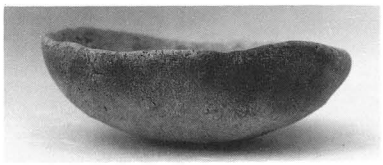
第33図　ＳＩ58住居跡出土遺物

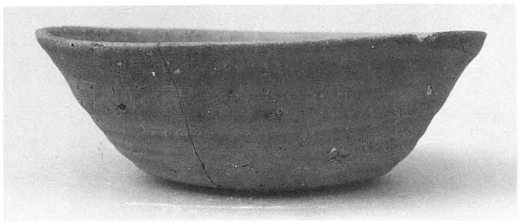

1


3


2


4


5


6

7

8

1	第 22 図 1	5	第 8 図 10
2	第 22 図 4	6	第 12 図 4
3	第 16 図 3	7	第 13 図 5
4	第 8 図 11	8	第 12 図 3

第34図　SI 58・59・62・68住居跡出土遺物

築館町文化財調査報告書　第１集

伊　治　城　跡

—昭和62年度発掘調査概報—

印　刷　昭和63年３月20日
発　行　昭和63年３月31日

発　行　築　館　町　教　育　委　員　会
宮城県栗原郡築館町薬師三丁目6−1
印　刷　小　野　寺　印　刷　所